
調査年報 6

平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年報 6

平成5年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

目 次

1	平成5年度の調査概要	1
2	調査遺跡	5
	美々8遺跡	5
	美々8遺跡 低湿部	9
	美沢3遺跡	15
	中野B遺跡	17
	茂別遺跡	23
	鳴川右岸遺跡	27
	滝里遺跡群	31
	滝里10遺跡	32
	滝里11遺跡	35
	滝里31遺跡	37
	オサツ2遺跡	39
	ユカンボシC2遺跡	43
	高岡1遺跡	47
	オサツトー1遺跡	51
	キウス7遺跡	53
3	研修・研究会等	57
4	刊行報告書	59
5	組織と機構	60

凡 例

- ・「2 調査遺跡」で遺跡名の後に付した（ ）内は、北海道教育委員会の登載番号である。
- ・各遺跡の位置図は、それぞれ国土地理院発行の2万5千分の1、あるいは5万分の1図を複製または縮小利用したものである。

1 平成5年度の調査概要

本年度は、道内の4市3町において14ヵ所の遺跡を発掘した。このうちの1ヵ所は事前発掘調査（試掘調査）である。総発掘面積は約69,000㎡におよんでいるが、発掘に要した期間や調査員の人数はさまざまで、面積も数百㎡から1万㎡を超えるものまでである。このほかに、土壌水洗とフローテーションのみを実施した遺跡が1ヵ所ある。本年度は調査した14遺跡のうち、11遺跡の報告書を刊行する予定である。

当センターでは、現地調査が2ヵ年度以上におよぶ場合も冬期間に整理作業を実施して、可能な限り単年度毎に報告書を作成してきた。しかし近年、美々8遺跡の低湿部・中野B遺跡・茂別遺跡などのように、遺構や遺物が大量に発掘され、当該年度では整理作業を終了することができないケースが増加している。これらの調査では、現場発掘期間中にも過年度の出土遺物の一部について、整理作業を札幌で実施しているが、現地調査の緊急度が高いことから、報告書作成までには発掘終了後も数年を必要とする見込みである。

以下に今年度の発掘の成果について、要約する。

千歳市と苫小牧市にまたがる新千歳空港建設工事に伴う、一連の遺跡調査は昭和51年度から実施されているが、平成4年の供用開始後も引き続いて、B滑走路の工事に先立つ調査が行われている。本年度は、美沢川を挟んで対峙する2ヵ所の遺跡を発掘した。左岸の美々8遺跡丘陵部では、鉄鍋と小刀を伴った土壌墓や道跡など、擦文時代から中近世・近代の遺構と遺物が発見された。同遺跡の低湿部では昨年度の調査で取り上げた土壌の水洗を行い、擦文時代からアイヌ文化期にかけての木製品や金属製品などが多数見つかっている。右岸の美沢3遺跡では縄文時代晩期の土壌やTピットが発掘されたほか、早期の遺物が出土している。両遺跡とも10年以上前から、調査が行われてきたが、現地発掘作業は今回をもってすべて終了した。

函館空港拡張整備に伴う中野B遺跡の調査では、昨年度に続き大量の遺構と遺物が発掘された。昨年度の調査分を合わせると、竪穴住居跡は約350軒におよぶ。竪穴内から縄文時代早期に属する各型式の土器が出土しており、永い年月にわたり集落が営まれていたことが分かる。この時期の集落跡としては、全国的にも有数の規模をもつ遺跡とみられるが、さらに約65,000㎡の発掘が予定されており、全貌が明らかになるのは数年後の見込みである。

国道防災工事に伴う上磯町の茂別遺跡の調査では、平成3年度からの発掘によって、続縄文時代の恵山文化に属する竪穴住居跡や墓壙が調査されている。今年度も同時期の住居跡を2軒発掘した。昨年度に続いて調査した縄文時代の「壕」は、後期初頭より以降のものであることが確認されている。

昨年度から調査に入った、函館新道工事に伴う鳴川右岸遺跡（旧 仮称 国立療養所裏2遺跡）では、今年度も砂防工事用地を含めて発掘が行われた。遺跡主体部から縄文時代中期の竪穴住居跡や土壙などの遺構が見つかっている。本遺跡の調査は、さらに約2,500㎡を残している。

芦別市東部で工事中の滝里ダム建設に伴う滝里遺跡群の調査は、平成元年度から継続されている。今年度も3ヵ所の遺跡で、計24,000㎡あまりの面積を発掘した。滝里10遺跡では縄文時代晩期の土壌から数百点の石鏃が出土した。滝里31遺跡では有舌尖頭器とみられる黒曜石の石器が2点出土している。このダム工事に関わる発掘調査は、今後およそ5年間にわたって行われる予定である。

千歳市の北部では、道営畑地帯総合土地改良事業に伴い2件の調査が実施された。このうち、昨年度に続いて行われたオサツ2遺跡の調査では、1辺約9mにおよぶ擦文時代の竪穴住居跡が発掘されている。昨年度分を合わせて、発掘された住居跡は19軒になる。ほかに、縄文時代の竪穴住居跡、多

平成5年度 調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積	関連工事 (事業委託者)	備考
美々 8	千歳市	5,597㎡	新千歳空港建設(札幌開発建設部)	昭和56年度から調査。本年度で終了。
美々 8 低湿部	〃	—		平成1～4年度発掘。今年度は水洗選別他。
美沢 3	苫小牧市	6,340㎡		昭和51年度から調査。本年度で終了。
中野 B	函館市	11,210㎡	函館空港拡張整備工事(函館開発建設部)	平成4年度から継続調査。
茂 別	上磯町	733㎡	一般国道228号上磯町茂辺地防災工事(函館開発建設部)	平成3年度より継続調査。
鳴川右岸	七飯町	2,647㎡	一般国道5号[自専道] 函館道工事(函館開発建設部)	平成4年度より継続調査。
〃	〃	250㎡	鳴川砂防工事(函館土木現業所)	新規調査。終了。
滝里 10	芦別市	9,920㎡	石狩川水系滝里ダム建設(石狩川開発建設部)	新規調査。終了。
滝里 11	〃	6,700㎡		平成4年度より継続調査。未調査区あり。
滝里 31	〃	7,496㎡		新規調査。終了。
オサツ 2	千歳市	650㎡	都地区道菅畑地帯総合土地改良事業(石狩支庁)	平成4年度から継続調査。
ユカンボシC 2	千歳市	2,710㎡	長都地区道菅畑地帯総合土地改良事業(石狩支庁)	新規調査。終了。
高岡 1	豊浦町	4,090㎡	北海道縦貫自動車道建設(日本道路公団)	新規調査。
オサットー1	千歳市	1,700㎡	北海道横断自動車道建設(日本道路公団)	新規調査。終了。
キウス 7	千歳市	5,613㎡		新規調査。
キウス 4	千歳市	3,380㎡		事前発掘(試掘)調査。
計		69,036㎡		

2 調査遺跡

美々8遺跡 (A-03-94)

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市美々1292-381 ほか

調査面積：5,597m²

発掘期間：平成5年5月6日～9月18日

調査員：千葉英一、佐藤和雄、三浦正人、越田雅司

遺跡の概要

本遺跡は、美沢川左岸に広がる標高約20mの台地と川岸に近い低湿部からなっている。台地上とこれに続く斜面では、昭和56年度から8次にわたる発掘が行われてきたが、今年度ですべて終了した。

今年度は、昭和56年度調査区の北側に隣接する範囲の旧表土層と、第I黒色土層（I黒層）を調査した。調査対象面積は当初3,600m²あまりの予定であったが、工事区域内において遺物包含層が広がること判明したため、約2,000m²増加した。

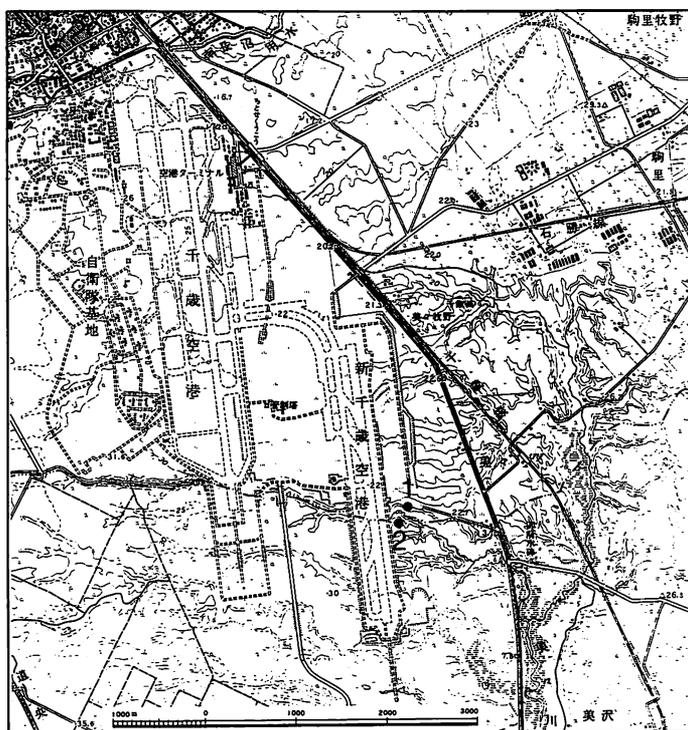
遺構と遺物

旧表土層で検出された遺構は小ピット52個である。これらは、およそ50cmの間隔で列をなすものと規則性がみられないものがある。調査区南西側に集中しており、旧室蘭街道に関連する杭跡の可能性はある。旧表土層からは陶器、金属製品（鉄鍋・薬笈ほか）、ビール瓶などが出土している。

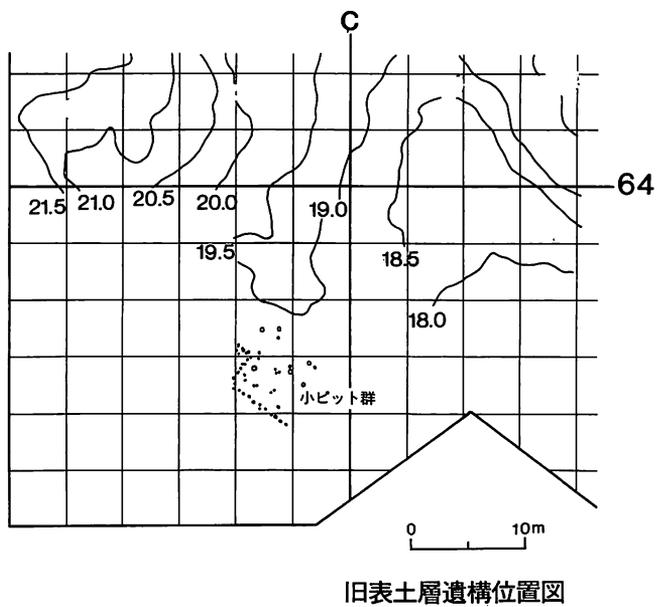
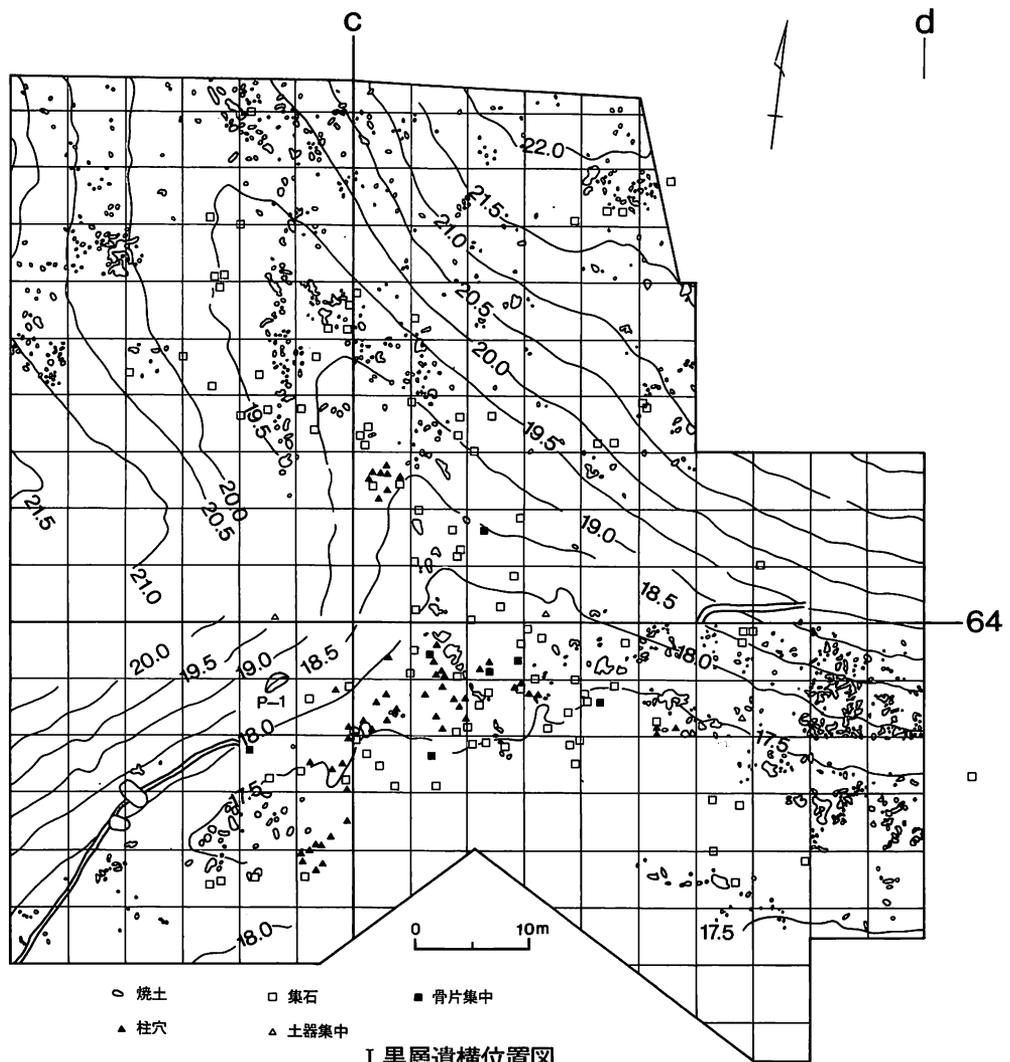
I黒層で検出された遺構は土壇墓1基、杭跡58個、道跡2条、焼土425ヵ所、骨片集中地点7ヵ所、集石100ヵ所である。土壇墓は調査区南西側の斜面に位置している。プランは長円形、長軸方向の土壇外に杭穴があり、鉄鍋と小刀が伴出している。

杭跡はおもに調査区の南側中央部に集中している。道跡は、窪みが深くほぼ等高線に沿って続くものと、等高線を横切る浅いものがある。焼土の大半はI黒層上面で確認された。このうち24ヵ所から焼けた骨片が検出されている。

集石はI黒層上面、あるいはこれより3cmほど下で検出されたものが多い。礫の大きさや個数、密度は様々である。このうち8ヵ所は大型の礫が対に並んだ「双礫」である。石材は片麻岩、砂岩、珪岩などである。I黒層で出土した遺物の大半は擦文時代の土器である。これに次いで礫が多い。このほかには石鏃、砥石、土錘、紡錘車、陶磁器、金属製品（鉄鍋・鎌・鉄鏃など）、古銭がある。クルミなどの自然遺物も出土している。



遺跡の位置 (1.美々8遺跡、2.美沢3遺跡)





表土層調査状況



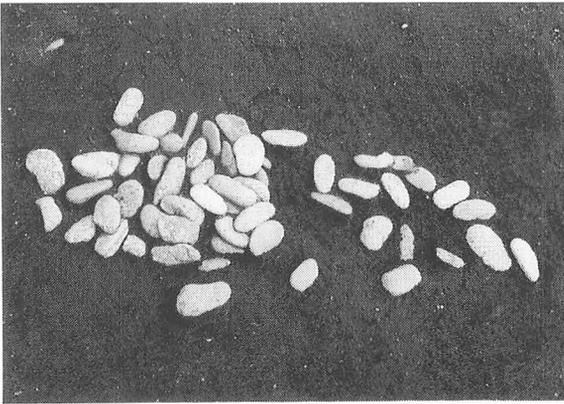
土壌 P-1



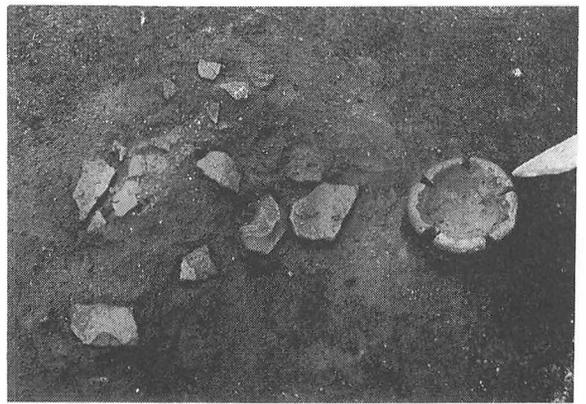
遺物出土状況 (P-1)



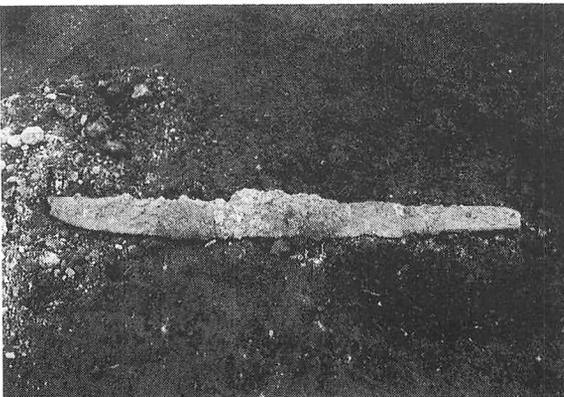
I 黒層 調査状況



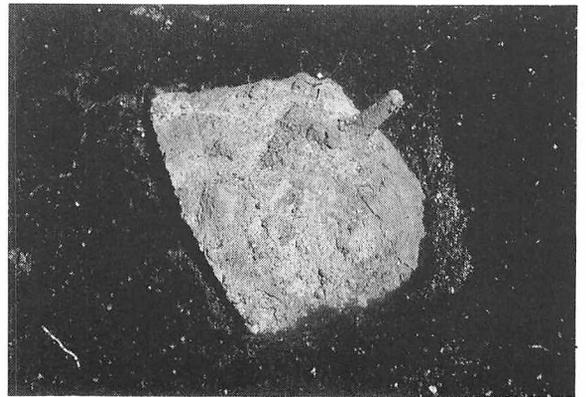
集石 IS-77



土器出土状況



山刀出土状況



鉄鍋出土状況

びび 美々8遺跡低湿部

整理期間：平成5年4月13日～平成6年3月26日（現地作業 5月6日～10月25日）

調査員：田口 尚、三浦正人、越田雅司

遺跡の概要

調査区は美々8遺跡のうち、美沢川左岸の湾入部（標高2.5m～6m）に位置する低湿地性遺跡である。発掘作業は、湧水とそれに伴って流動する火山灰の影響や、膨大な量の木製品の出土により困難を極め、平成元年度から4年度までを費やした。

本年度は札幌での室内整理のほか、昨年度の調査でグラムシェルにより採取した、約22,000袋（土囊）の土壌（大型遺物は抽出済）と、灰・炭・自然遺物などが集中する地点の土壌サンプル（ビニール袋 約550袋）の水洗選別を実施して、小型・微細遺物の検出を行った。灰の集中地点については、浮遊選別用サンプルを除いて水洗選別を行った。水洗作業には2か所に設けた井戸の水を用い、作業を効率的に進めるため工業用洗車機と特製フルイ台を使用した。

水洗選別で検出された主な遺物は、花矢、矢中柄、彫刻付篋、容器片、漆器片などの木製品のほか、鉄鍋片、銭貨、キセルなどの金属製品、擦文土器、石器、骨角器、ガラス玉、陶磁器片などである。また、加工痕のある魚獣骨片、浮遊選別で得られた堅果類や種子は膨大な量となっている。各種分析や遺物の保存処理を含め、整理作業は今後、数年をかけて進められる予定である。

遺構・遺物の概要

平成元年度からの調査で発掘された遺構と遺物は、旧表土層～I黒層から検出されたものである。Ta-a（1739年降下）とTa-b降下軽石層（1667年降下）の間の0黒層、およびTa-a下のI黒₁層で検出された、アイヌ文化期のものが大部分を占める。4ヵ年度の調査結果について、以下に要約する。

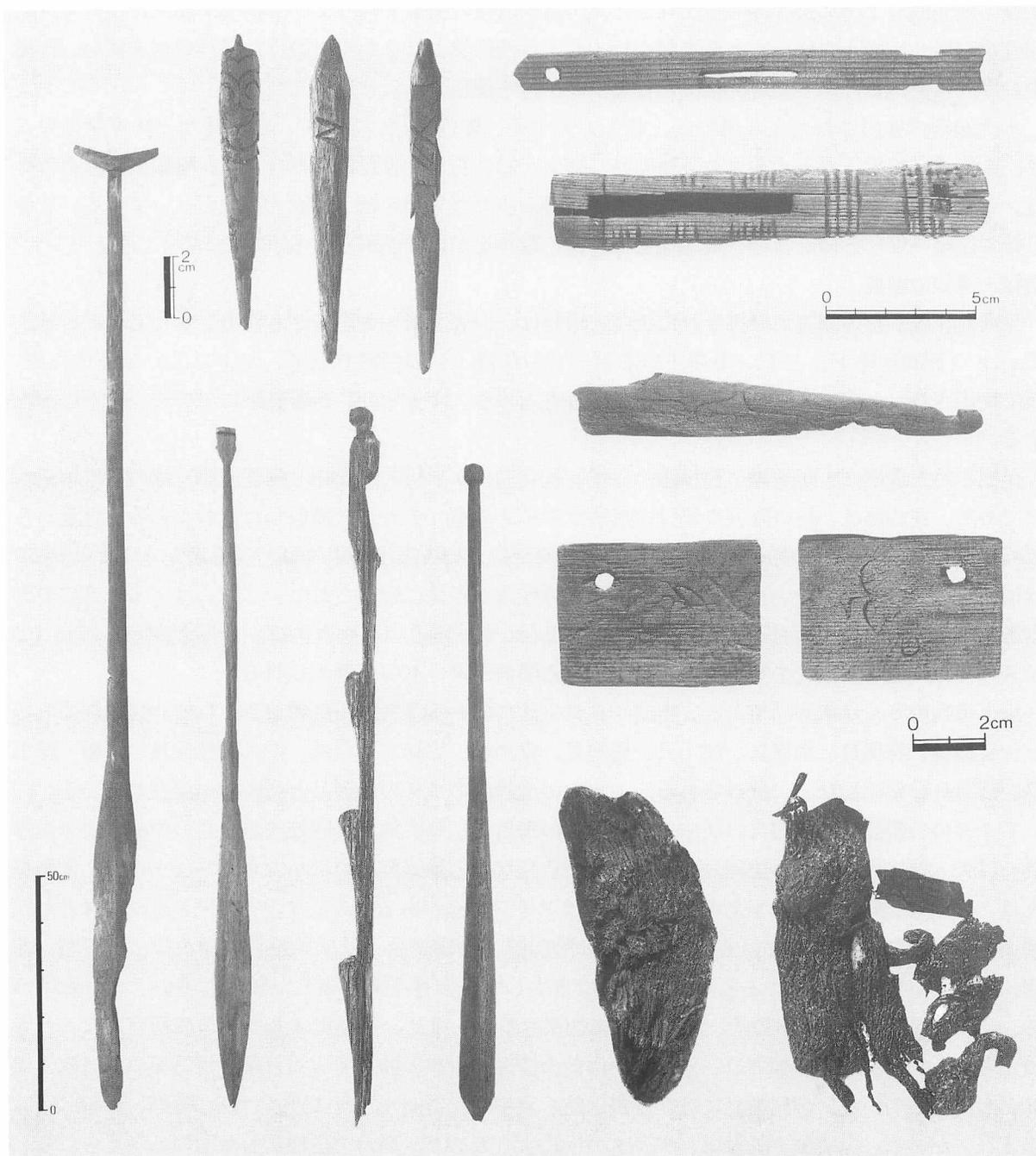
発掘された遺構は、舟着場、建物跡、立杭、杭穴のほか、灰・炭化物・自然遺物・礫の集中地点などである。建物跡は、柱の配列や建材の形態がアイヌの家（チセ）に酷似したものがある。付近からは高床式倉庫（プー）の梯子も出土している。灰や炭化物の集中地点では、表土層からI黒₂層までほぼ同一位置に重なって、損傷した遺物や食物の残渣が多量に検出された。これらはアイヌ文化の動物送り（オプニレ）や道具送り（イワクテ）を複合した灰送り（ウナラエウシ）場と推測される。アイヌの「もの送り」儀礼や集落（コタン）形態と関係が深いものと考えられる。

出土遺物の多くは木製品である。生業や日常生活に関わる豊富な用具類がみられる。用途別にみると、交通具、狩猟具、漁撈具、加工具、農耕具、食用具、容器、日用品、燈火・発火具、運搬・結束具、装身具、祭祀具などに分けられる。これらの遺物はアイヌの自製品と和産物が混在している。

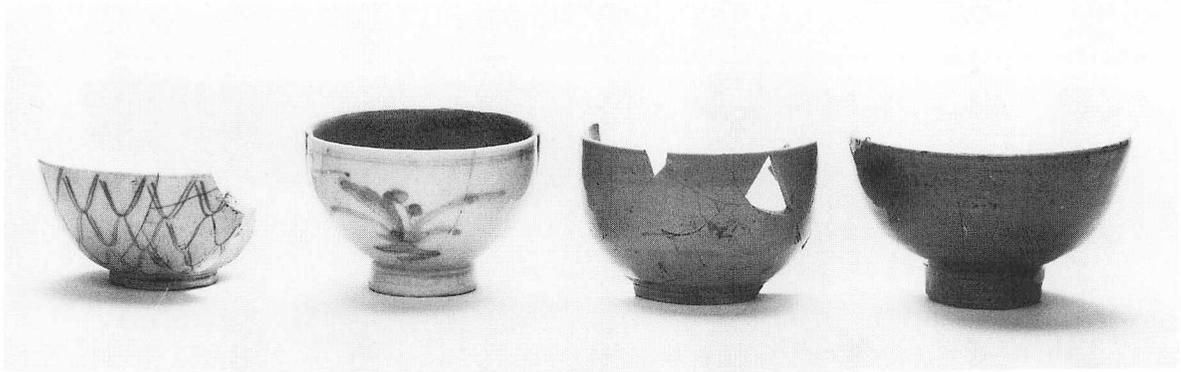
アイヌの自製品には板綴舟の舷側板や櫂などの舟用具、魚突鉤台・回転式離頭銚の中柄などの漁撈具、弓矢・仕掛弓台などの狩猟具、背負縄・背負袋などの繊維製品のほか、マキリ、タシロ、木製発火具、捧酒箸、制裁棒などがある。これらにはアイヌ文様があるもの、イトクパ・メカジキなどが線刻された用具類も含まれている。和産物には陶磁器、金属製品、ガラス製品のほかに、漆器類、曲物、桶・樽、風呂鍬などがある。北海道には自生しない樹種を素材とした製品も多い。これらのうち、イトクパの刻まれたものや、別製品に再加工されたものは、交易によりアイヌの所有になったものと考えられる。陶磁器類では、珠洲系や備前の播鉢、唐津の砂目皿・天目碗、伊万里の染付碗・皿などが出土している。金属製品には、鉄鍋、鉈、マキリ、キセル、カスガイ、釘、帯飾、指輪(?)、銭貨などがある。魚突鉤や釣針は、アイヌの手によりカスガイや釘を再加工したものと考えられる。アイヌ玉と呼ばれる、透明あるいは青・青緑の蜜柑玉や平丸玉などのガラス製品もある。陶磁器、金

属製品、ガラス製品には、中国や北方系とみられるものも少し含まれている。石製品には木製台付の携帯用砥石、金属研磨用の大型7面砥石、軽石製の火皿状製品、火打石がある。骨角器には矢中柄、魚突鉤台石突部の保護具とみられるもの、周縁に三螺子蛇目文を刻んだ環状製品がある。

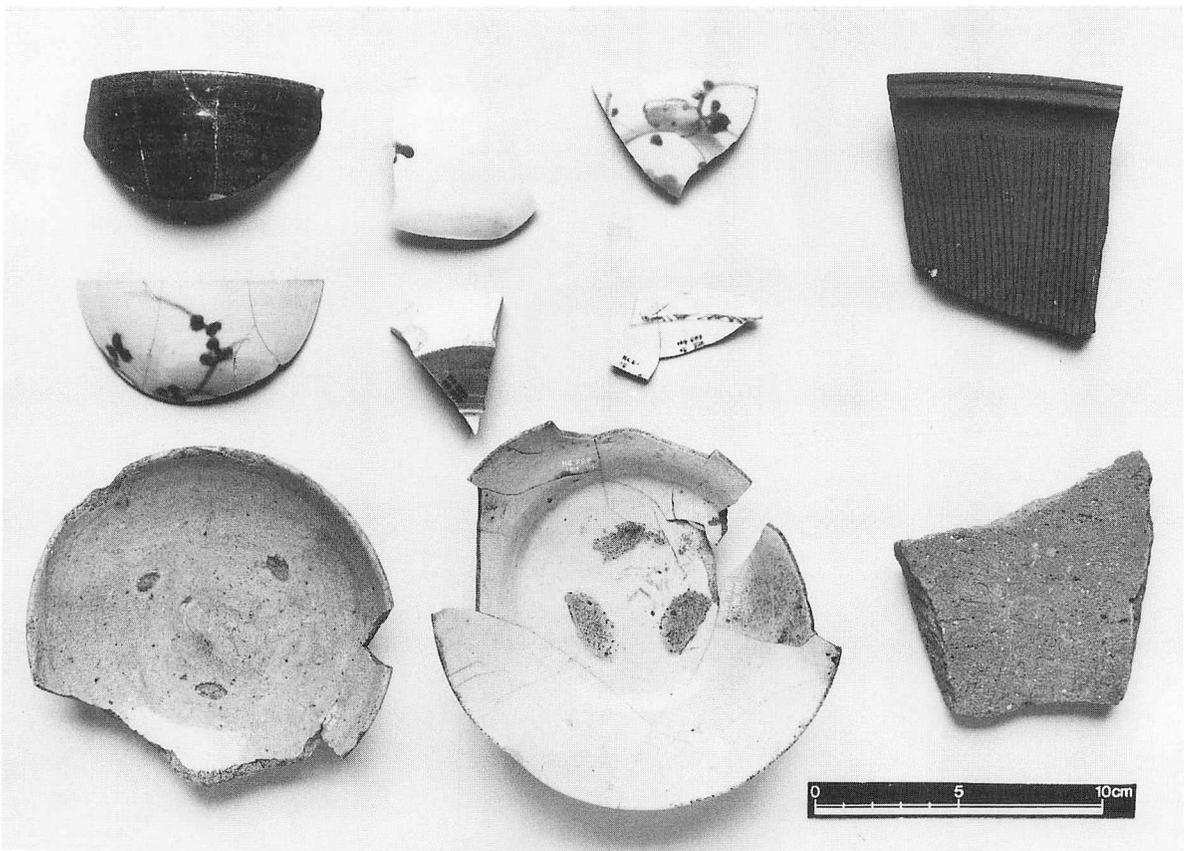
食物残渣ではサケ、シカを主とする動物遺存体や、オニグルミ、ミズナラなどの堅果類、アワ・ヒエなど栽培植物の種子が多量に検出されている。また、I黒₂層以下には苫小牧火山灰（10世紀中頃に降下）の上下に分布する擦文時代の土器・石器がある。これに伴って木製品や金属製品も出土しており、擦文文化とアイヌ文化の関わりを検討するための有意義な資料と思われる。また、器面に墨書やヘラ書きされた刻文のある土師器の坏も出土している。



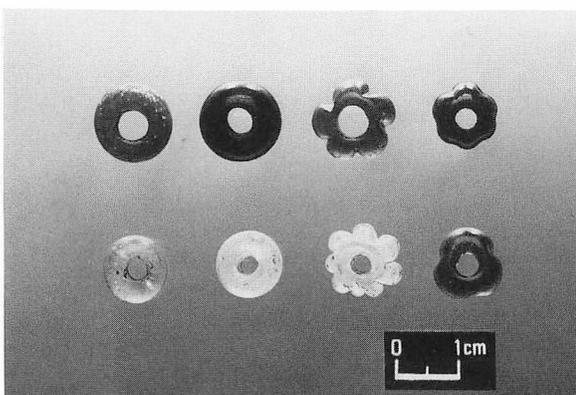
木製品



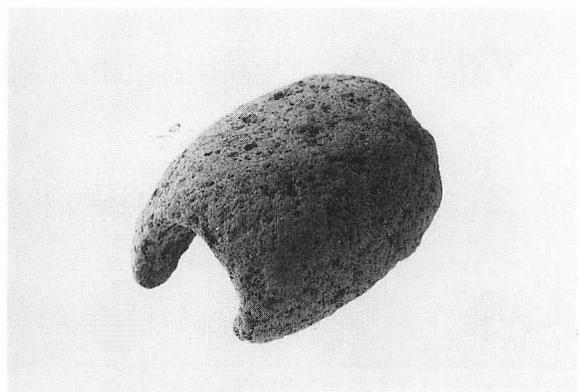
陶磁器



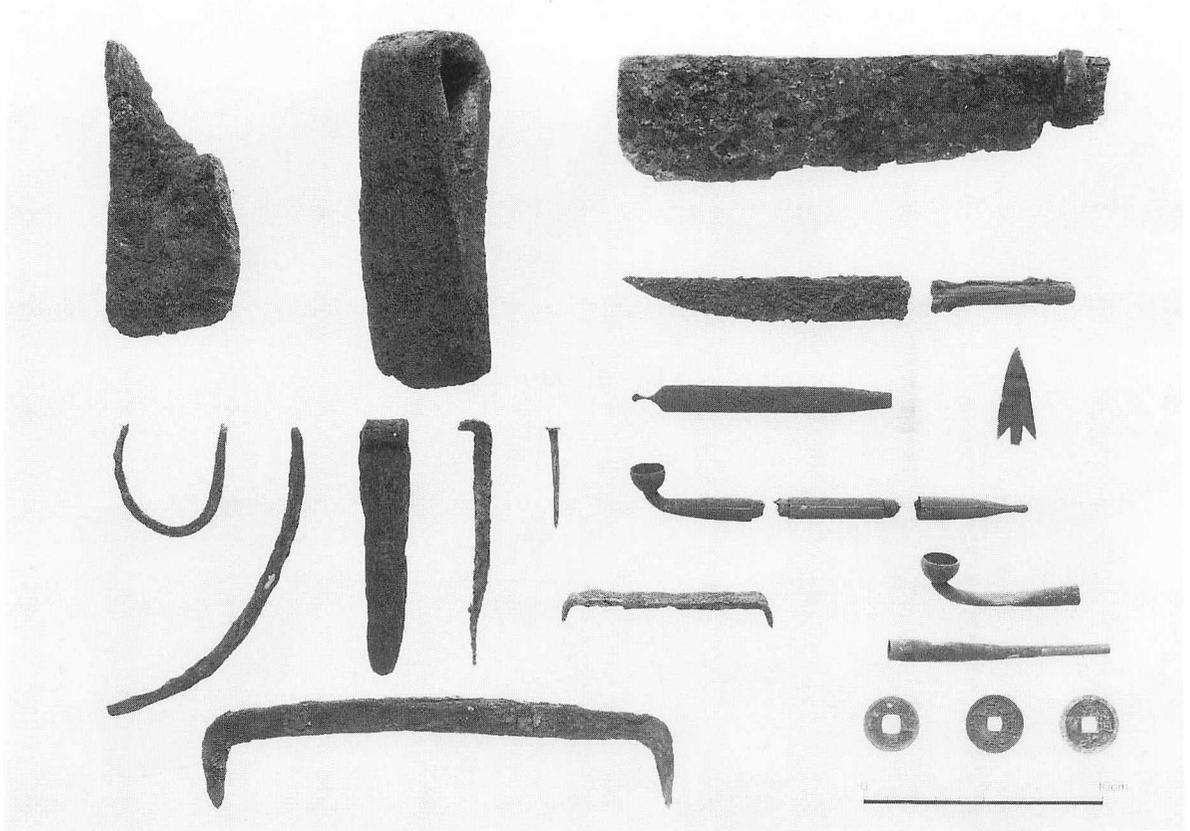
陶磁器



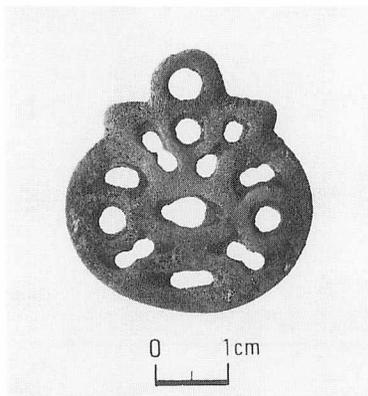
ガラス玉



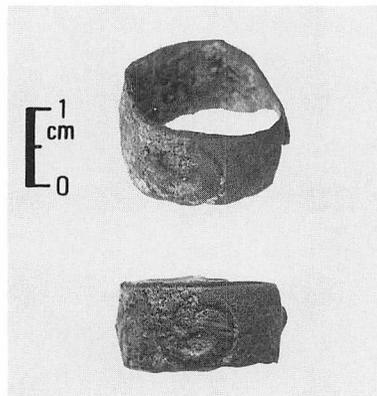
土 錘



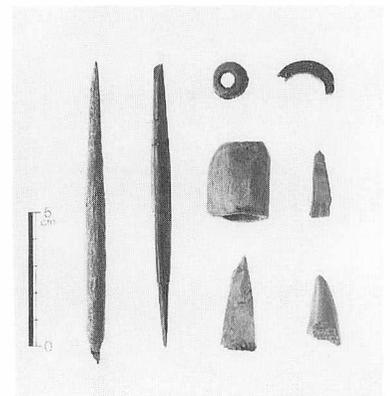
金属製品



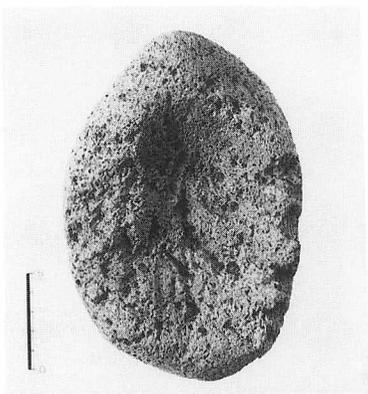
帯飾



指輪



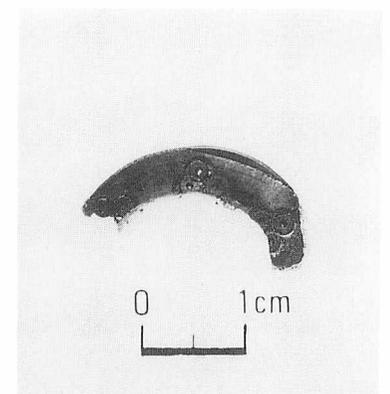
骨角器



火皿



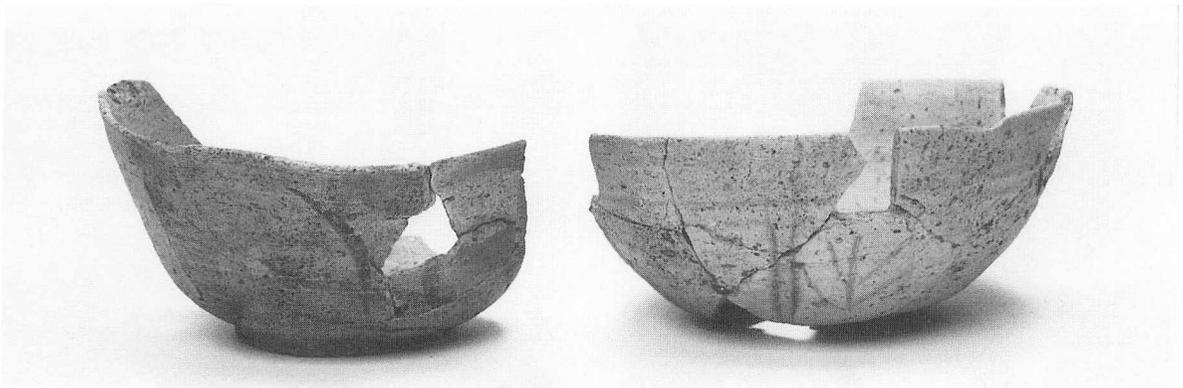
砥石



三螺子蛇目文の製品



擦文土器



坏 (左・墨書、右・刻文)



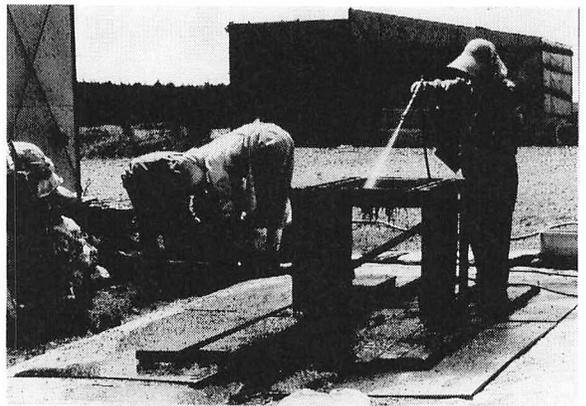
墨書



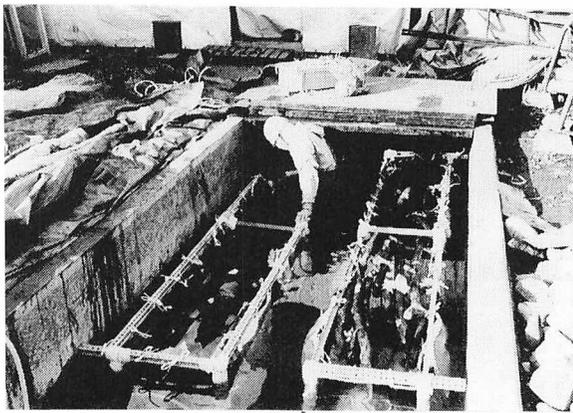
刻文



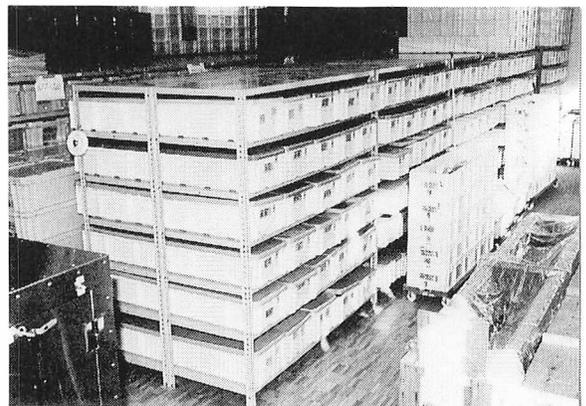
採取した土壌



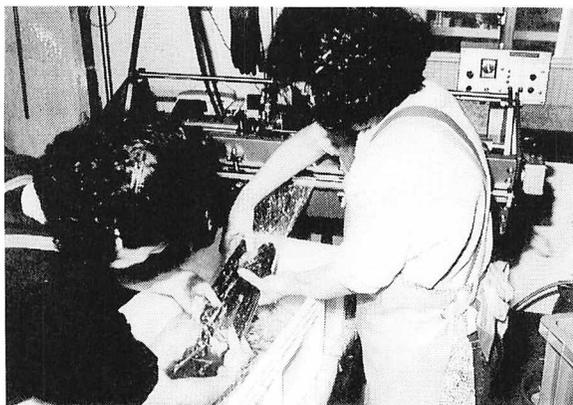
土壌水洗作業



木製品の水つけ



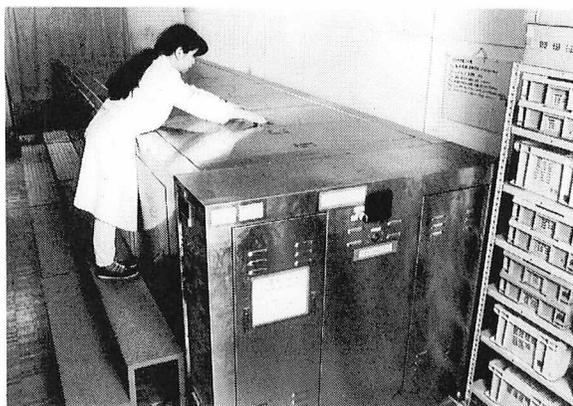
水つけにした木製品の保管状況



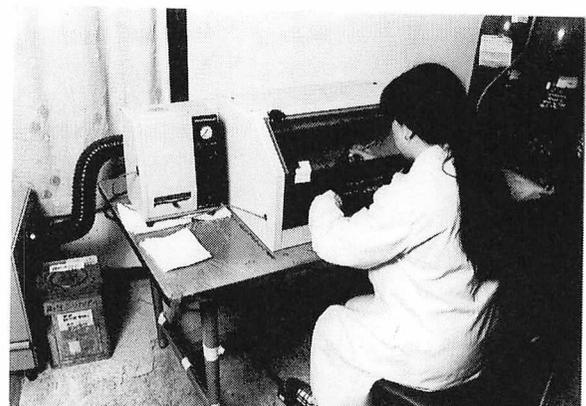
脱気シーラパックによる木製品の一次保存



真空凍結乾燥法による木製品の保存処理



PEGによる木製品の保存処理



金属製品の錆の除去

美沢3遺跡 (J-02-81)

事業名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：苫小牧市美沢164-10ほか

調査面積：6,340㎡

発掘期間：平成5年7月13日～10月28日

調査員：佐藤和雄、三浦正人、越田雅司

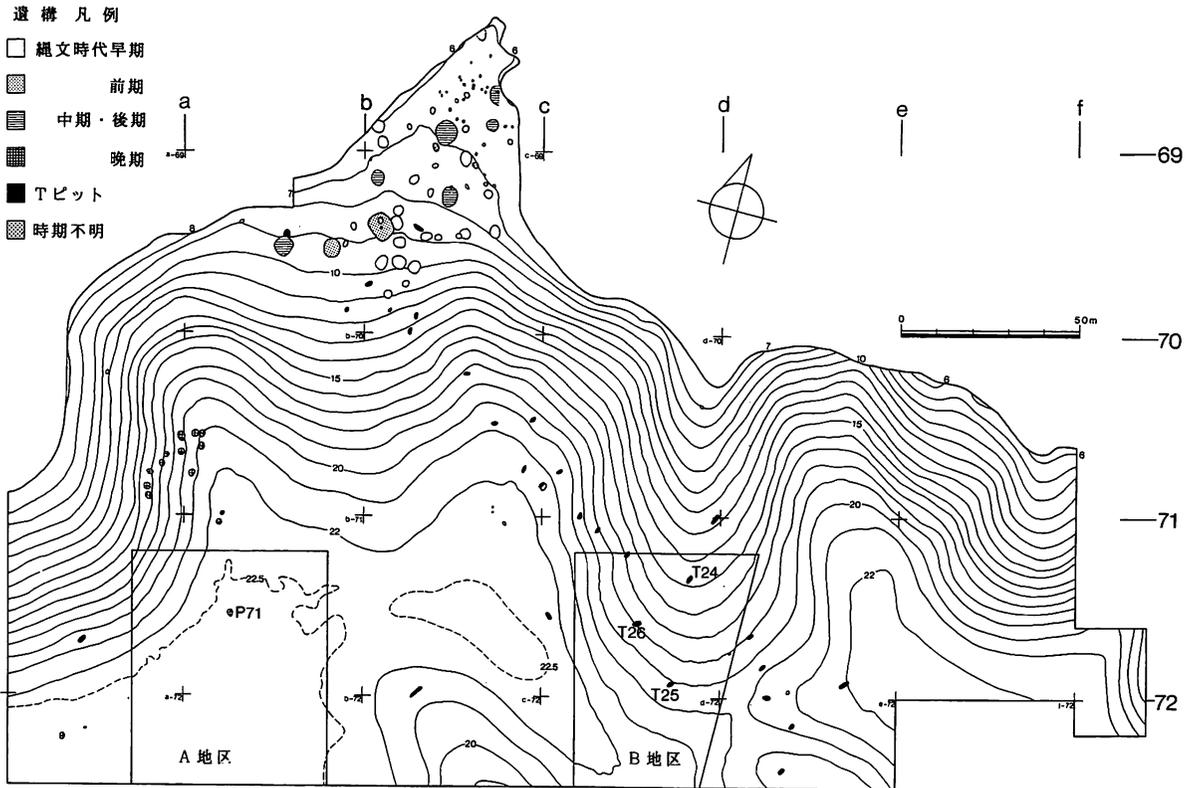
遺跡の概要

美沢3遺跡は、新千歳空港の建設用地内にある美沢川流域の遺跡のうち、最も下流の右岸に位置している。千歳から苫小牧を通る国道36号から、美沢川に沿って約1.5km上流にあたり、対岸には美々8遺跡がある。遺跡は、美沢川に臨む標高6mの低位段丘縁辺から背後の斜面、さらに標高22mの台地上部の平坦面にかけて広がっている。昭和51年度から断続的に調査が行われてきたが、6ヵ年目にあたる今回が、本遺跡の最終調査年度となる。調査総面積は41,662㎡におよんでいる。

今年度の調査区は、a-71・72区とb-71・72区にまたがるA地区(3,575㎡)と、d-71・72区とe-71区にまたがるB地区(2,765㎡)の2ヵ所である。ともに第Ⅱ黒色土層(Ⅱ黒層)を調査対象とした。A地区は、標高22.5m前後のほぼ平坦な台地上に広がり、北西部には美沢川へ下る急傾斜面になっている。B地区は台地平坦面と美沢川へ差し込む沢の沢頭にあたり、全体に北向きに傾斜している。地区内の高低差は約8mである。

遺構と遺物

A地区では、円形ピット1基(P-71)が検出された。Ⅱ黒層上面に浅い窪みがあったことから確認されたものである。出土遺物はなく、覆土は自然堆積である。周縁には揚げ土とみられる火山灰

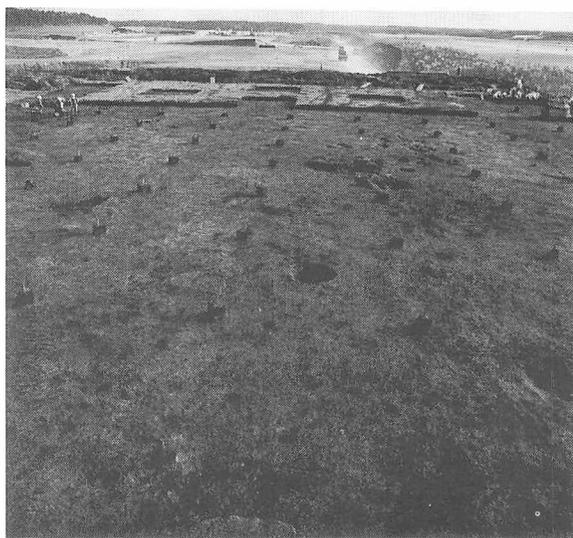


遺構位置図

(Ta-d)が広がっていた。平成元年度にこの北側で調査された、13基の円形ピットと類似しており、これらと同じく縄文時代晩期の遺構と考えられる。

B地区では、3基のTピット(T-24・25・26)を検出した。3基ともプランは壙口が楕円形、壙底は直方体形になっている。それぞれ、壙底には2本の杭穴が確認された。いずれも、過年度までに調査した楕円形プランのTピットと、列をなす配置になっている。両地区では焼土も検出されている。ほかに、ヒトのものとみられる足跡やウサギやキツネなど動物の足跡も検出されている。

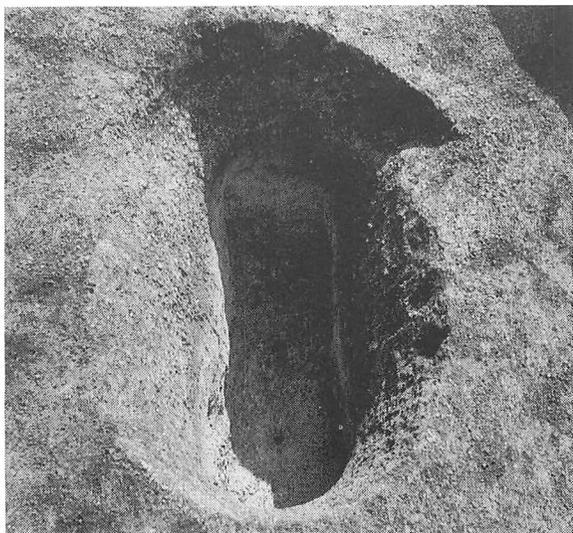
出土遺物は約5,600点、8割以上が土器片である。縄文時代早期の中茶路式と東釧路IV式土器がB地区の台地平坦面を除く全域に分布しており、まれに一個体分がまとまって出土した。A地区の土器は東釧路IV式が主体で、ほかに後期の堂林式が一個体出土している。B地区では中茶路式土器が主体である。石器は早期の土器に伴うもので、剥片石器が125点、礫石器が32点ある。剥片石器には、頁岩製のつまみ付ナイフや黒曜石製の石鏃が多くみられ、礫石器にはすり石、たたき石などがある。A地区では、黒曜石のフレイクが、やや濃く分布する部分があった。特殊な遺物では、A地区b72-20区で出土した蛇紋岩製の垂飾の未成品がある。



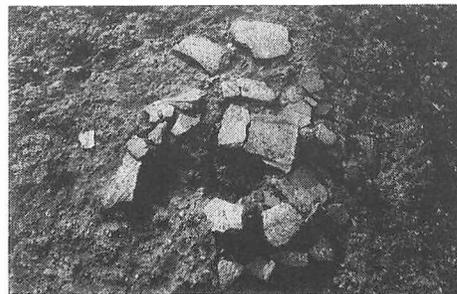
A地区 調査状況



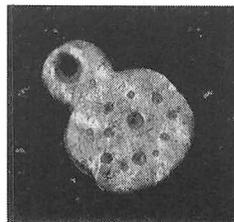
B地区 調査状況



Tピット T-24



土器出土状況



石製品出土状況

なかの
中野B遺跡 (B-01-39)

事業名：函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局函館開発建設部

所在地：函館市中野町98-3 ほか

調査面積：11,210㎡

発掘期間：平成5年5月6日～10月28日

調査員：高橋和樹、和泉田毅、遠藤香澄、花岡正光、谷島由貴、熊谷仁志、山原敏朗
村田 大、倉橋直孝

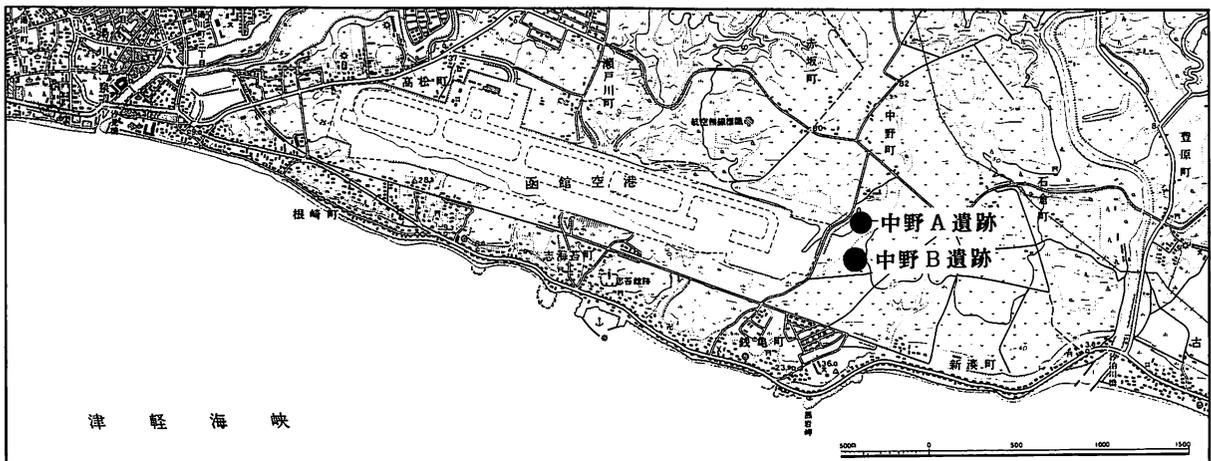
遺跡の概要

中野B遺跡は函館市街地の東方約8kmにあり、函館空港現滑走路の東端部に隣接している。地形的には津軽海峡へ注ぐ小河川、銭亀宮の川の河口から700～800m遡った、標高40～50mほどの左岸段丘上に立地しており、川を挟んだ対岸には中野A遺跡が位置する。空港拡張整備のための市道切替に伴う中野A遺跡の発掘調査は当センターが平成3・4年度に実施し、完了した(北埋調報79・84)。

今回の中野B遺跡の発掘調査は、滑走路の下に落ちる銭亀宮の川の河川切替工事に先立つもので、平成4年6月に着手、今年度に引継がれた。滑走路のセンターラインより南の調査区については、本年7月末までに調査を終え、直ちに工事が開始された。センターラインより北側も、10月末までに完了した。今回の調査をもって、本遺跡のうち河川切替え用地の発掘は全面的に終了したが、空港整備工事に係る本遺跡の調査対象総面積は8万㎡以上におよんでおり、発掘調査は来年度以降も継続される予定である。

中野B遺跡は、昭和50年度にも進入灯工事区域1,920㎡が函館市教育委員会によって調査されており、縄文時代早期中葉の住吉町式土器を伴う竪穴住居跡が21軒、土壇15基のほか、Tピット22基など多くの遺構・遺物が検出されている。

当センターによる昨年度の調査は、昭和50年度調査区の南西に隣接する3,550㎡を対象としたもので、住吉町式土器やムシリI式土器の段階の竪穴住居跡148軒、土・墓壇64基、焼土4ヵ所、集石2ヵ所、剥片集中地点2ヵ所のほか、Tピット12基など極めて多数の遺構が見い出された。遺構の内部や周囲の遺物包含層から土器片、石器など20万点を超える遺物が得られている。昭和50年度の成果から、大規模な集落跡が存在することは十分予想されていたが、縄文時代早期中葉の段階で、これほど多くの遺構や遺物を調査した例はほかになく、注目をあつめた。



遺跡の位置

本年度は、昨年度調査区の西隣にあたる段丘縁辺部から低地にかけての2,000㎡とセンターラインより北側の3,900㎡を主体に、計7,550㎡を発掘する予定で調査に入ったが、遺構・遺物の量が予想より少ない部分があったため、3,660㎡を追加した。

遺構と遺物

本年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡202軒、土壌102基、焼土12ヵ所、集石1ヵ所、剥片集中地点2ヵ所のほかTピット29基と多数にのぼる。しかし、昨年度に比べると、遺物は全般的に少なく、最終集計は済んでいないが、およそ10万点程度とみられる。銭亀宮の川に面した台地上では傾斜面から低地にかけての部分では、遺構・遺物がほとんど検出されていない。台地上でも遺構の数に比して、遺物量は少なかった。

本年度の調査で検出された集落跡は、大きくみて三つの地区に分けられる。第一は、ほぼ52ラインより南の一帯である。この範囲は、昭和50年度および平成4年度調査区を含む中野B遺跡の主体部であり、きわめて多数の竪穴住居跡や土壌が密集、重複している。第二は、54ラインから57ラインまでの地区で、5軒の竪穴住居跡と2基の土壌が見い出された。第三は、61ラインから68ラインまで、27軒の竪穴住居跡や29基の土壌が検出された調査区の北端地区である。なお、市道中野線より南では、遺構の検出はまったくなく、遺物がわずかに採集された程度であった。

第一の地区は、今年度の調査で発掘された170軒の竪穴住居跡と約70基の土壌、これに昭和50年度と平成4年度調査分を加えて、318軒の竪穴住居跡、180基以上の土・墓壇などが見い出された大集落跡である。東方の調査未了範囲にもさらに多数の遺構が分布しているものと推定される。時期的には、住吉町式土器からムシリI式土器の段階までの頃に営まれたもので、連続と居住が繰返された結果が、このような集中と重複になって残されたものと判断される。昨年度の調査区では、環状の集落構成が窺える部分があったが、今年度の調査区は全体に住居跡の重複が著しく、環状の構成がさらに幾つか重なったように複雑に集合し、錯綜した状況を示している。土壌は昨年度と同様に、竪穴住居跡の縁辺に重ねて掘り込まれた例が多い傾向が認められたが、まとまった分布傾向を指摘できるところはないようだ。

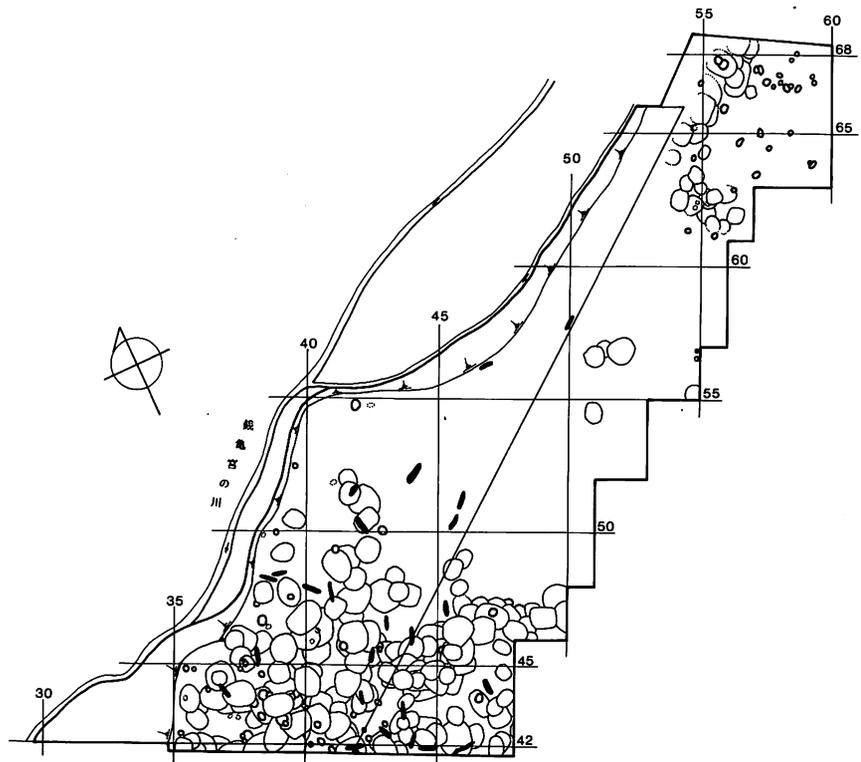
今年度の調査で検出したこの地区の竪穴住居跡の形状は、著しい切り合いと重複のため全貌を窺えないものが3割を超えるが、プランは楕円形や卵型が主流で、次いで円形および隅丸形状のものが多い。このほかに不整な台形状のもの、あるいは隅丸長形状の住居跡も見られた。規模は、長径がほぼ3～7mの範囲におさまり、5m前後のものが多い。長径が8mを超える例はない。内部に炉跡や灰の痕跡が認められた竪穴は、全体の1割に満たない。支柱穴は1～5本程度と考えられるが、楕円形や卵型、円形プランのものでは、支柱穴が1本という例が比較的多いようだ。また、形状や規模に関わりなく、壁沿いに多数の支柱穴がめぐる例が多く、支柱穴のさらに外側にジグザグ状に配置された、土留めに利用されたと思われる小ピットが並んだ住居跡もあった。

床面および床面直上で出土した遺物は比較的小さい。復元可能な一括土器が検出された竪穴住居跡はH-149・150など10軒である。H-150・161・163・181では、まとまった数の石錘が出土、石皿や大きな礫も残されていた。H-161の柱穴内では土器片や石錘、H-320の柱穴からは擦石が検出されている。

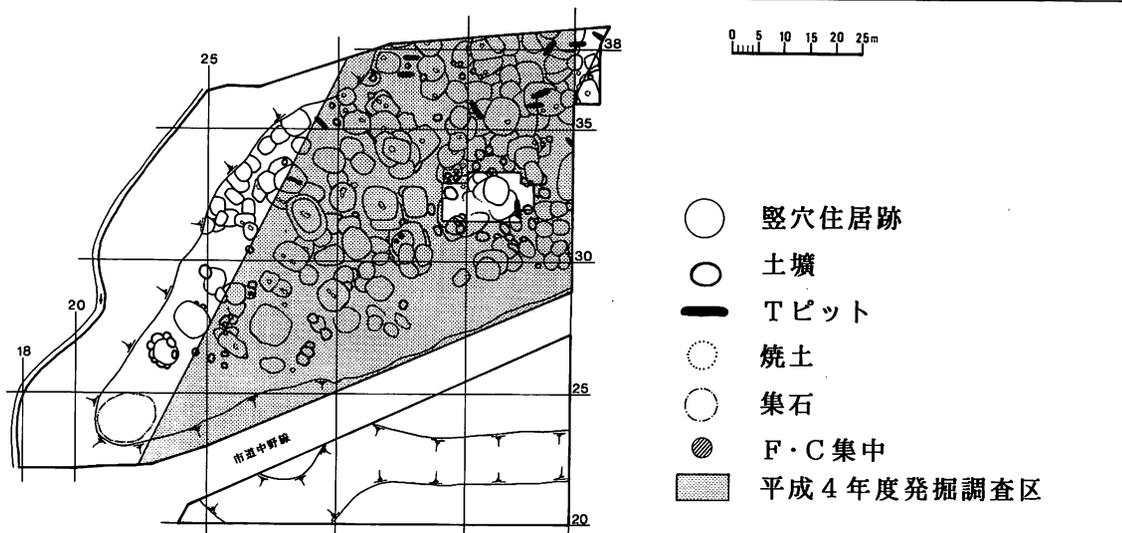
土壌の大部分は円形もしくは楕円形のプランであるが、隅丸方形や隅丸長方形、不整な台形や卵型といった平面形を呈するものもある。多くは断面形が皿状の浅いもので、フラスコ状のP-99や、鍋底状を呈する比較的深い例は少なめであった。規模は、長径が30cmから3m未満のものまでであるが、70cm以上1.6m未満のものが全体のほぼ6割を占めている。土壌の出土品には、P-78・79・84・

101・128など、土器の大片や復元可能な一括土器を伴った例や、P-84・101・102・119などのように石皿や擦石、石錘、たたき石や石核、石斧や擦切原材などを伴った例もある。石錐やつまみ付ナイフなど剥片石器を伴う土壌もわずかにみられた。P-129では、ベンガラとみられる赤色顔料を含んだ土壌が検出され、その壙底にある小ピットの中から土器片が発見された。

竪穴住居跡の覆土やその周辺の包含層からは、多くの遺物が出土した。土器型式をみると、住吉町式が8割程度と非常に多く、次いでムシリI式土器が1割強を占めている。ほかに表館VI群や東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式および縄文前期前葉の土器片も少量出土している。剥片石器類には石鏃、石槍、石錐、石匙、篋状石器、スクレイパー、U・Rフレイクなどがある。器種はス



滑走路センターライン



遺構位置図

クレイパーがとくに多い。石匙も比較的多く、石鏃、石錐なども見られる。石斧など磨製石器の類はやや少なく、たたき石、擦石、石皿、砥石、石錘など礫石器の類が比較的多い。とくに石錘の比率は高く、擦石もやや多い傾向が認められた。

第二の地区では、5軒の竪穴住居跡と2基の土壇が検出されたが、この一帯は近年まで農家の敷地になっていた所で、遺構の保存状態は不良であった。竪穴住居跡のプランはほぼ円形もしくは楕円形で、規模は長径が2.5m以下のものから6m近いものまで見られる。炉はなく、支柱穴や壁沿いの支柱穴の配列も規則的ではない。伴出遺物はほとんどなく、構築年代を確定する資料に乏しい。土壇のプランは円形。径は50～70cm程度で、P-154には石皿と刺突列・貝殻腹縁を押し引いた文様が施された土器が出土した。

第三の地区は範囲確認調査の結果から、遺構はきわめて少ないものと考えられていたが、予想に反して竪穴住居跡など多くの遺構が発見された。しかも、その分布は調査予定範囲を超えて北へ続いており、360㎡を拡張して調査したが、さらに北方のすでに工事がおよんでいる部分にも遺構の拡がりがあった可能性がある。この地区の一帯には、地表下80～100cmに達する、農地改良のための大がかりな心土破碎が加えられており、竪穴住居跡は主に農道部分など、心土破碎がおよんでいない所に検出された。発掘された竪穴住居跡は26軒に達しており、東方の未調査区にも拡がる可能性がある。土壇は21基検出されたが、深く掘り込まれたものが多いようで、心土破碎がおよんだ所でも、その痕跡が見い出されている。発掘された竪穴住居跡群は北から南西の方向に続き、さらに東方へと弧状に延びている。土壇群はその内側に分布するようにも見られ、あるいは環状の集落構成の一部とも思われる。

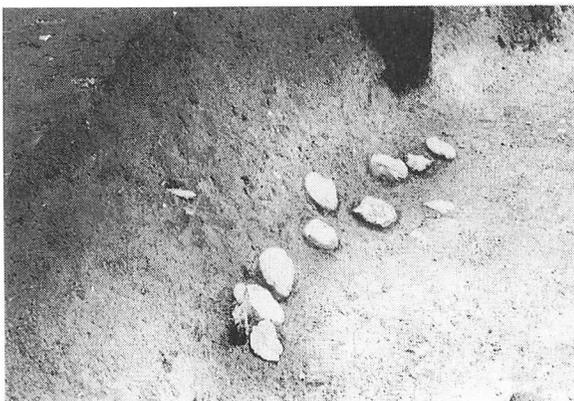
竪穴住居跡は重複しているため、平面形が不明なものもあるが、楕円形や円形、卵型といったプランのものが多い。炉のあるものはごく少ない。支柱穴の配列は不明確な例が多いが、多くの住居跡には壁沿いにめぐる支柱穴が検出された。竪穴住居跡、土壇ともに遺物の伴出がほとんどなく、構築の時期を確定しがたい。土壇には、その壇底部に火山灰らしい、砂っぽい層の堆積がみられる例があり、この火山灰の起源の解明が土壇の構築年代の手がかりをもたらす可能性がある。

Tピットは、これらの集落跡とは直接には関係しないようで、南北グリッドの38～58ラインまでの広い範囲にわたって、29基が発見された。いずれも溝状の細長いタイプのもので、長径が3～4m程度のものが主体である。現段階では特別な分布傾向や、とくに整然とした配列を認めることはできず、長軸方位は必ずしも一定していない。Tピットは竪穴住居跡を切っている例が少なくなく、これまでの所見と同様、縄文時代早期中葉より以降に構築されたものと考えられる。なお、今回T-18としたものは、昭和50年度の調査でT-15と呼ばれたものの北半部であることが判明した。

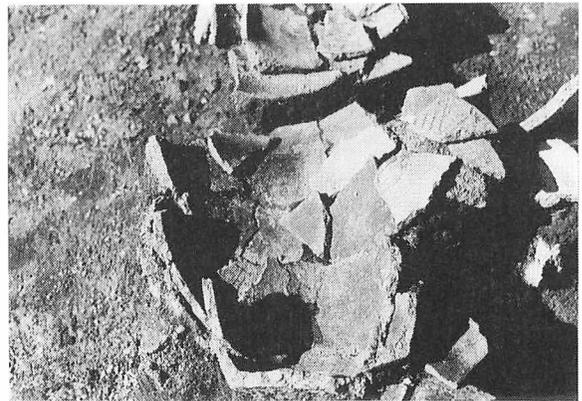
以上が今年度調査の概要であるが、現場の発掘作業が優先的に進められており、整理作業にはかなりの期間を必要とする見込みである。



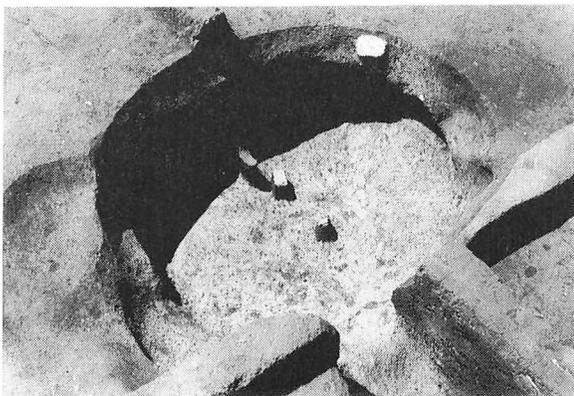
遺跡遠景（空撮）



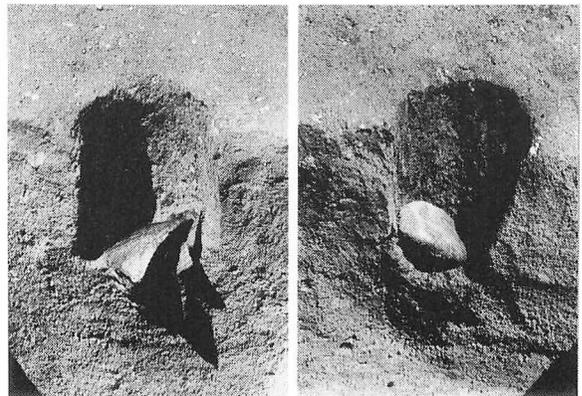
石錘出土状況（H-181）



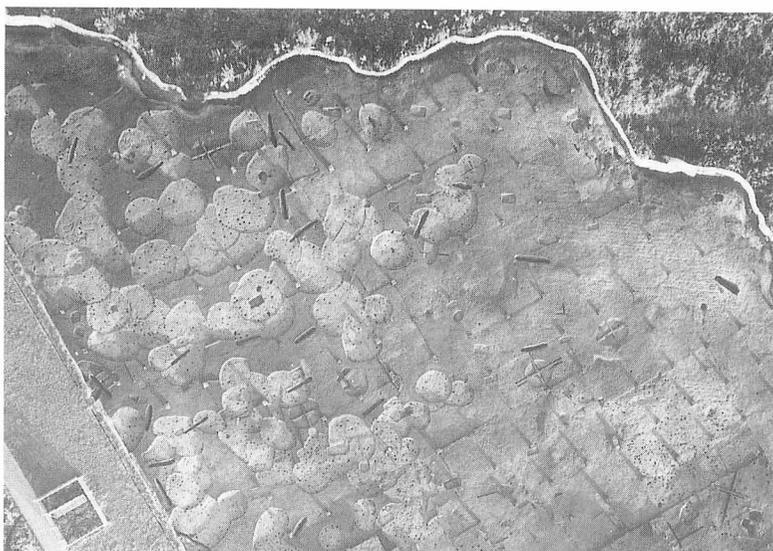
土器出土状況（H-149）



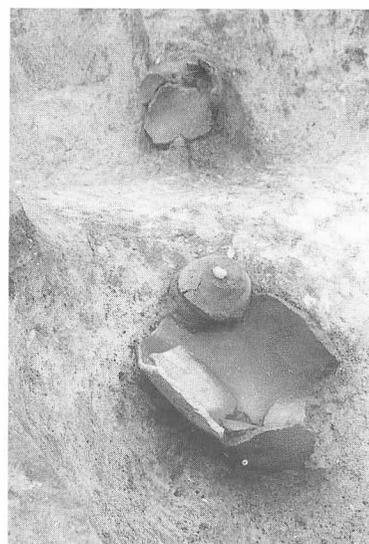
フラスコ状ピット（P-99）



柱穴内遺物出土状況（H-161）



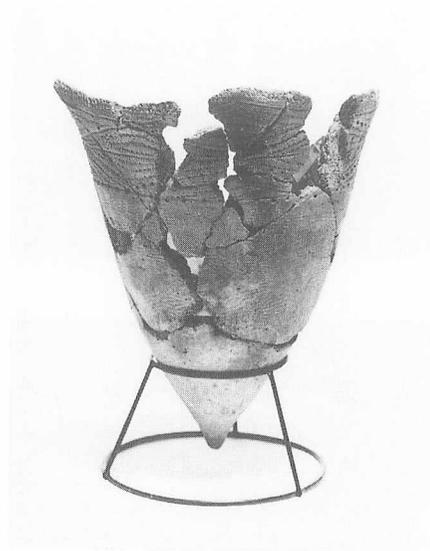
遺構分布状況（空撮）



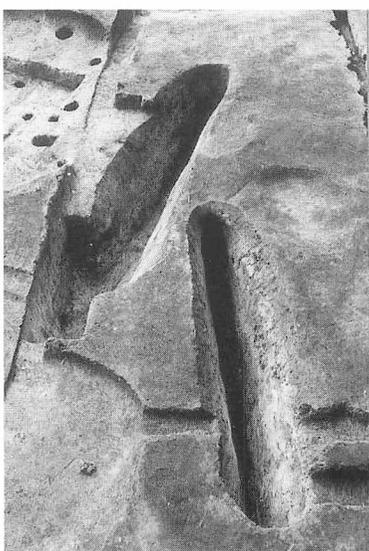
土器出土状況



調査状況



縄文時代早期の土器



Tピット T-26・38



縄文時代早期の土器

もつ 茂別遺跡 (B-06-17)

事業名：一般国道228号上磯町茂辺地防災工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局函館開発建設部

所在地：上磯郡上磯町字矢不來103-1 ほか

調査面積：733㎡

発掘期間：平成5年5月6日～7月17日

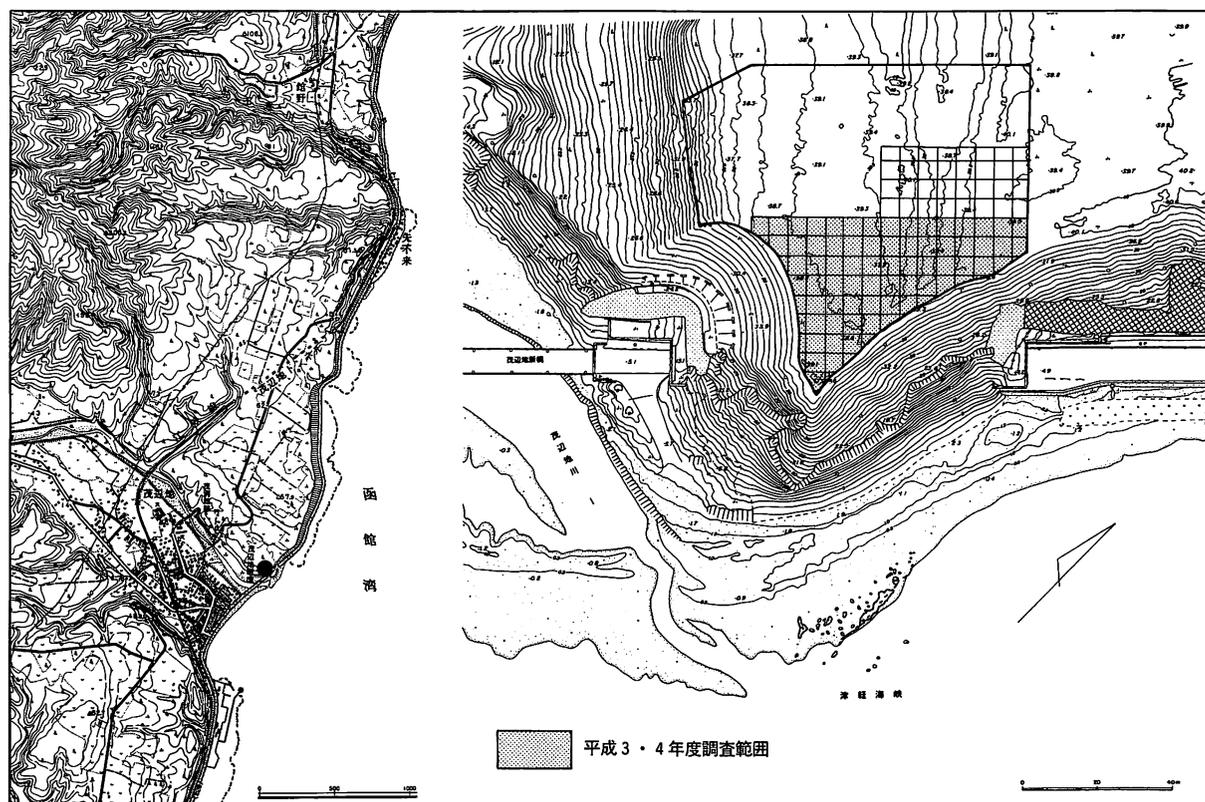
調査員：越田賢一郎、工藤研治、西脇対名夫

遺跡の概要

本遺跡は茂辺地川河口の左岸段丘上（標高39～40m）にある。過去2ヵ年度の調査で、続縄文時代の竪穴住居跡5軒、墓12基とともに大量の遺物が出土しており、恵山文化の良好な遺跡であることが判明した。また、縄文時代の大規模な「壕」、竪穴住居跡、墓のほか、近世以降の建物跡や溝なども検出されている。調査は来年度以降も継続される予定である。

土層は上位から、Ⅰ層（表土・耕作土）、Ⅱ層（白頭山-苫小牧火山灰）、Ⅲ層（腐植土）、Ⅳ層（漸移層）、Ⅴ層（地山）に区分される。続縄文時代の遺構・遺物はⅢ層上部、縄文時代のものは主にⅢ層中・下部で検出されている。

今年度は調査対象区域のうち北西部分を発掘した。また、現地調査に並行して平成3年度に出土した遺物の整理作業を札幌で行った。なお、平成3・4年度に出土した遺物の各種分析や同定結果が得られている。炭化種子にはアサ、ヒエ属、タデ属、アカサ属、マタタビ属、キハダ属、ウルシ属、ブドウ属、クルミ属がある（北海道大学 吉崎昌一氏同定）。黒曜石の原材産地分析では、試料68点中に青森県出来島産と秋田県男鹿産のものが、各1点ずつ含まれていた（京都大学原子炉実験所 藁科哲男氏分析）。



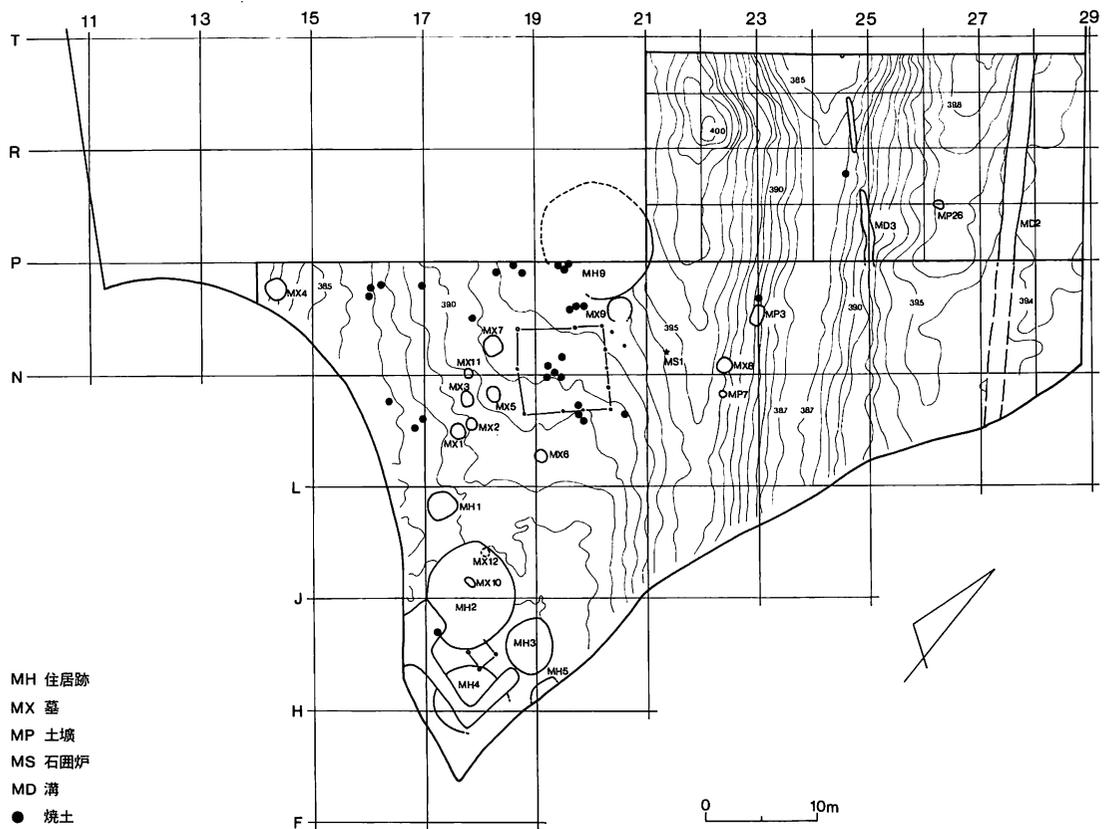
遺跡の位置と地形

遺構と遺物

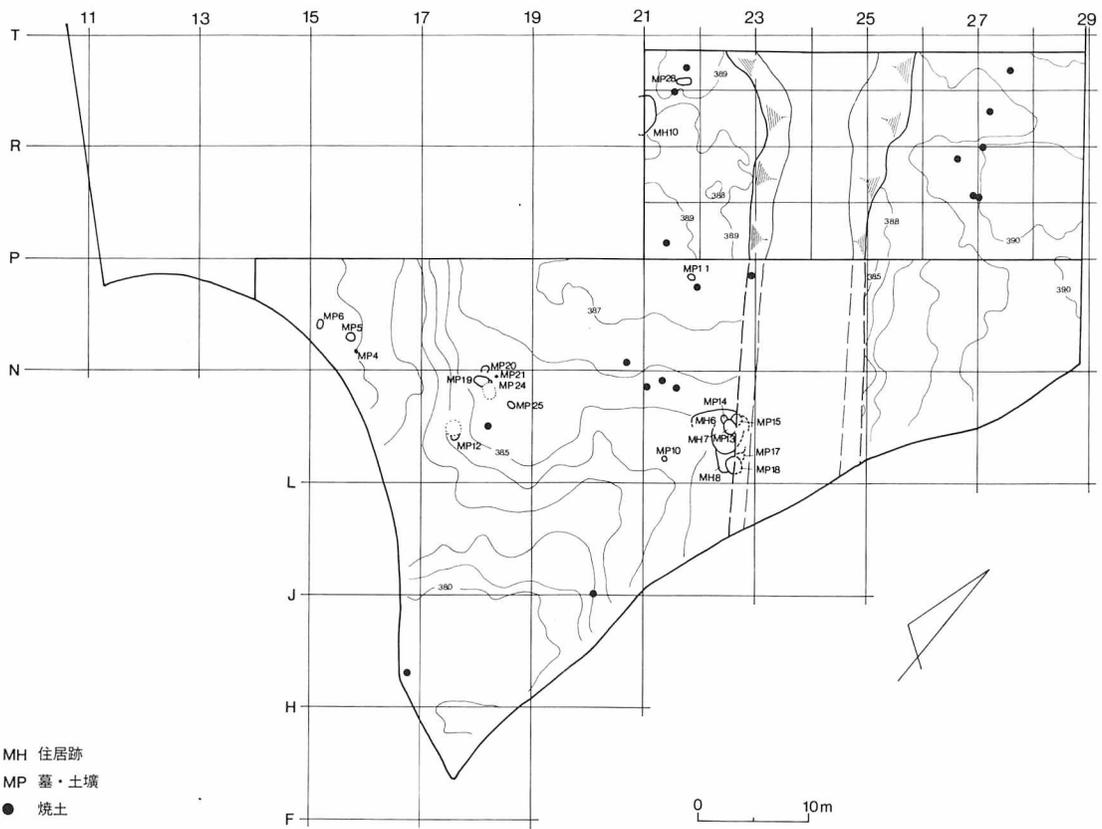
今年度の調査で検出した遺構は、昨年度調査区から続く「壕」のほか、竪穴住居跡2軒、土壇2基、溝2条、焼土11ヵ所である。出土遺物は約88,000点。このうち50,000点あまりが土器片である。このほかに、搬入されたものと考えられる礫が約135,000出土している。

〈Ⅲ層上部の調査〉Ⅲ層上部では、続縄文時代の竪穴住居跡（MH-9）の一部を発掘した。壁高は約40cm、Ⅲ層下部まで掘り込まれている。直径10mほどの円形の竪穴住居跡と推定されるが、張り出し部の有無は未確認である。このほかに、Ⅲ層上部ではⅠ層から掘り込まれた近世以降の溝2条、土壇1基、焼土1ヵ所が検出された。

〈Ⅲ層中・下部の調査〉Ⅲ層中・下部では主に「壕」の調査を行った。「壕」は地表から沢状の凹地として認められ、崖ぎわから台地の奥に向かって調査区の外に続き、延長約120mにわたって確認できる。「壕」の掘り込み面はⅢ層の中ほどにあり、底はⅤ層にまで達している。掘りあげた土は両側に盛り、尾根状の高まりになっている。「壕」の深さは盛土の頂部から底まで約1m、幅は盛土の頂部間で約20mあり、Sラインより山側では幅25mを超える。盛土の調査では、盛土の中位に掘り込み面がある土壇1基（MP-28）と焼土を4ヵ所を確認した。盛土内から出土した遺物には円筒土器上層式、ノダップⅡ式、煉瓦台式、余市式などの土器がある。とくに、円筒土器上層式は盛土の下部から多量に出土した。出土量は少ないが、「壕」の底から出土した土器にも盛土内の土器と同様のものがある。「壕」の構築時期については詳細を検討中だが、盛土の下位で検出された竪穴住居跡MH-10の覆土下部から、一個体分の余市式土器の破片がまとまって出土しており、縄文時代後期初頭以降であることが確認された。Ⅲ層中・下部では、このほかに焼土が6ヵ所検出された。出土した遺物には、縄文時代早期、前期、中期のものがある。土器は円筒土器下層式が多い。



Ⅲ層上部の遺構位置図



III層中・下部の遺構位置図



縄文時代の「壕」



盛土下部 遺物出土状況



土壌MP-28の土層断面



焼土の検出状況



遺物出土状況

なるかわうがん
鳴川右岸遺跡（B-08-69）〔旧 仮称 国立療養所裏2遺跡〕

事業名：一般国道5号函館新道（自動車専用道）工事用地内埋蔵文化財発掘調査
鳴川砂防工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局函館開発建設部・北海道函館土木現業所

所在地：亀田郡七飯町字桜町695-11

調査面積：2,897m²（函館新道工事用地内 2,647m²、砂防工事用地内 250m²）

発掘期間：平成5年7月19日～10月30日

調査員：越田賢一郎、工藤研治、西脇対名夫

遺跡の概要

本遺跡は、昨年度実施された北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地確認調査により、函館新道用地内で発見されたものである。工事計画の変更が不可能であることから、昨年8月より発掘調査に入り、10月末までに北西側2,925m²を発掘した。当初は国立療養所裏2遺跡と仮称していたが、埋蔵文化財包蔵地登録に際し鳴川右岸遺跡と改称された。遺跡はJR七飯駅の北東約2km、横津山系南西麓の丘陵先端部と、これに続く鳴川扇状地の扇頂部に立地している。標高は142～161m、鳴川の対岸に国立療養所裏遺跡が位置しており、南西500m足らずの距離に縄文時代早期の遺跡として著名な鳴川遺跡がある。

全調査対象面積は約8,000m²。本年度は、昨年度調査区に接する遺跡中央部と砂防工事が行われる遺跡南端の鳴川河川敷部分を調査した。丘陵斜面上方は遺構・遺物が希薄であることから、重機を併用した遺構確認調査の対象とした。

土層は、昨年度に準じて上位からⅠ層（表土、植林等による人為攪乱層）・Ⅱ層（火山灰およびその風化土壌）・Ⅲ層（腐植質土、縄文・続縄文時代の遺物包含層）・Ⅳ層（基盤層との漸移層）・Ⅴ層（基盤層）に区分した。Ⅱ層中には、上位に駒ヶ岳火山灰d層（Ko-d）、下位に白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm）に比定される降下火山灰層が認められ、調査区のほぼ全域に分布している。また、場所によってはⅢ層の下部に駒ヶ岳火山灰g層（Ko-g）とみられる黄橙色の火山灰層が認められ、この層より下位では遺物は出土していない。なお、調査区の南西部では、Ⅲ層が鳴川由来の段丘堆積物中、および段丘面上に砂・礫層と互層をなしており、堆積の順序に応じて年代的な細分が可能である。このような知見と遺構・遺物の状況から、縄文時代における鳴川の流路や段丘地形の変遷を推定できるものと考えられる。

本遺跡の調査は来年度以降に継続される予定であるが、2ヵ年度分の調査成果をまとめた報告書の刊行を本年度末に予定している。



遺跡の位置

遺構と遺物

確認された遺構は竪穴住居跡2軒、土壇38基、埋設土器1基、炉跡・焼土67ヵ所である。竪穴住居跡は2軒とも丘陵斜面の比較的高い位置（標高149～153m前後）に構築されており、斜面下手では壁面の残りがよくない。ともに主柱穴と炉跡が確認され、比較的大型のH-4では、建材の一部が炭化して残っていた。2軒とも覆土からサイベ沢Ⅵ式ないしⅦ式にちかい円筒土器上層式の新しい類が出土している。

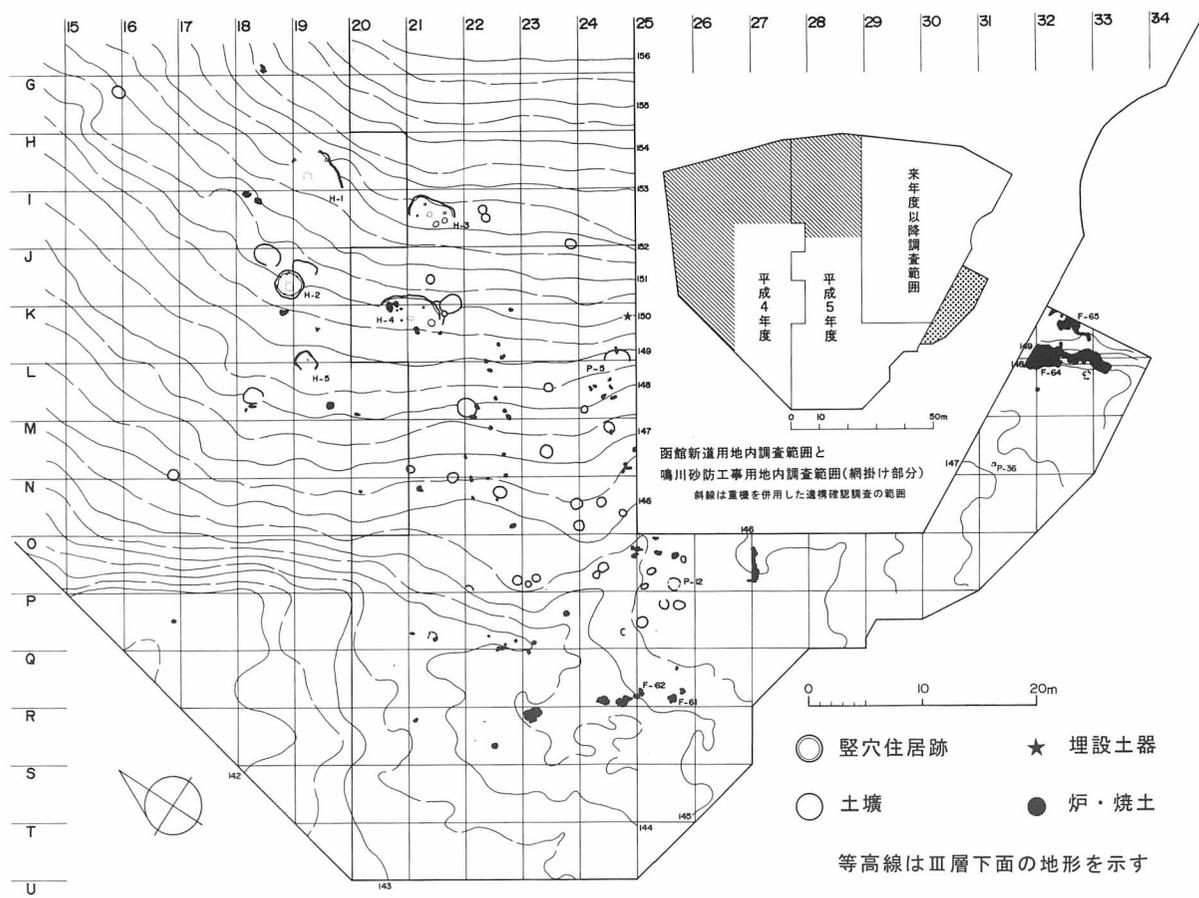
土壇は斜面のかなり上部から段丘面まで、広く分布しているが、縄文時代晩期の土器が出土したP-36を除くと、中期に氾濫原であったとみられる面から、川寄りでは確認できない。プランは円形で、径、深さとも60～80cmのものが多いが、長径2m前後の楕円形のものや径10～30cm程度の小型の土壇も見られる。2～4基が隣接して作られているところもあるが、切り合いは少ない。ほぼ完形のサイベ沢Ⅶ式土器1個体が出土した土壇が2基ある。このほかは、覆土に礫を多く含む場合があるが、遺物は概して少ない。

炉や焼土も、斜面にあるものと段丘上に位置するものがある。後者は縄文時代前期の氾濫原にあるもの、中期の氾濫原にあるもの、それ以降の面にあるものに年代的な区別が可能であり、前期に2例、後期には1例の石囲炉を含んでいる。斜面の焼土も竪穴住居跡の覆土中で確認された例など、縄文時代中期のものと同判断できる場合がある。斜面の南東端では、かなり規模の大きい焼土の一部（F-64・65）が確認されたが、これらは函館市中野A遺跡に見られるような、広い面積をもつ焼土にちかい性格のものかも知れない。

本年度の調査によって出土した遺物の総数は約28,000点。内訳は、土器片が約24,000点、石器・土製品等が約650点、剥片約2,000点、礫および礫片約1,100点である。このうち、遺構の覆土から出土したものは約1,500点である。このほかに、焼土などから採取した土壇のフローテーションにより、炭化材を主とする植物遺体や微細な剥片などが得られている。

土器は縄文時代前期から擦文時代までのものがあり、円筒土器下層d式の範疇に入る前期末の土器と円筒土器上層式の新しいものが大半を占めている。両者は丘陵斜面の下部から、縄文時代前期に氾濫原であったとみられる面にかけて最も多く出土しており、完形あるいは復元可能な個体がかかり認められた。前期の土器は炉や焼土の周囲に、中期のものは住居跡のない斜面の下部に多く遺棄され、その後あまり攪乱されていない状況が窺われる。中期の土器は同時代の氾濫原であったとみられるQないしRラインから川寄りでも出土している。後・晩期の土器は主に27ラインから南東の、中期後半以降に形成された段丘面で出土しており、余市式と大洞C₂式類似のものがある。続縄文時代では恵山式土器があるが、擦文土器とともに出土量はわずかである。

石器は北海道式石冠、扁平打製石器、石皿などの礫石器が多い。剥片石器ではスクレイパー類が主である。扁平打製石器と石皿は、鳴川の河床にある扁平な安山岩礫を利用したとみられるものが多いが、北海道式石冠には河床にあまり見られない青みをおびた火成岩が主に使われている。また剥片石器は大半が硬質頁岩製で、わずかに黒曜石のものが見られる。2,000点あまり出土した剥片のうち約1,700点は、径2mほどの集中出土地点（縄文時代前期）の土を水洗して得られたもので、これを除くと本遺跡で剥片石器の製作がおこなわれた形跡は乏しい。このほか装飾のない土版状の土製品なども発見された。



遺構位置図



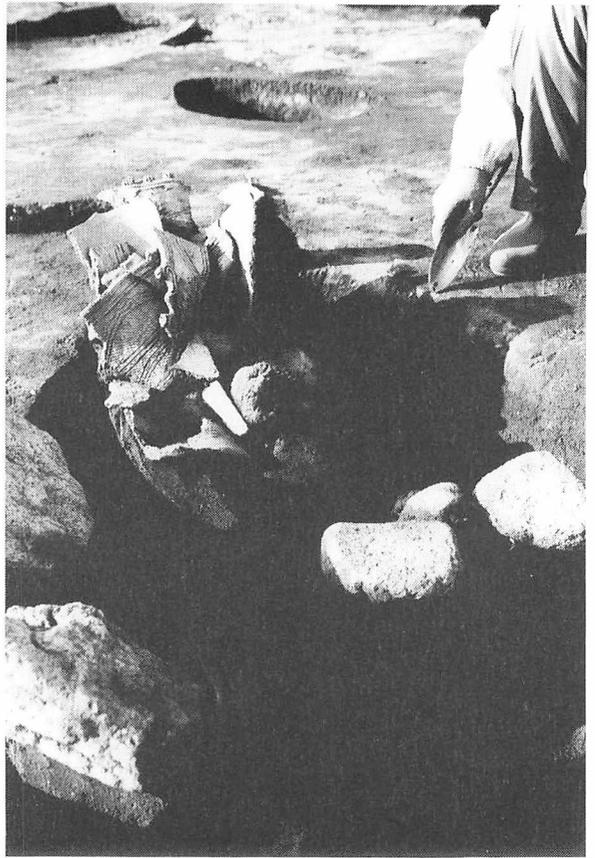
調査状況



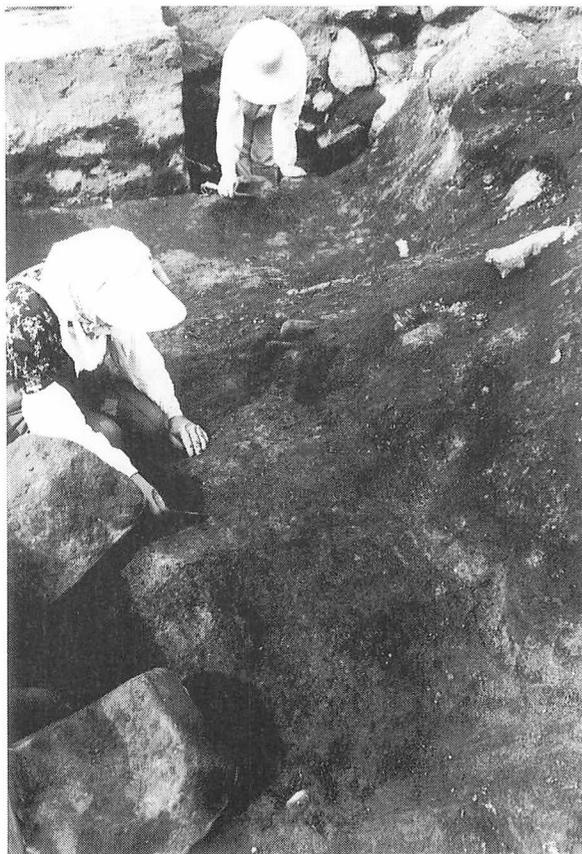
土壌 P-5



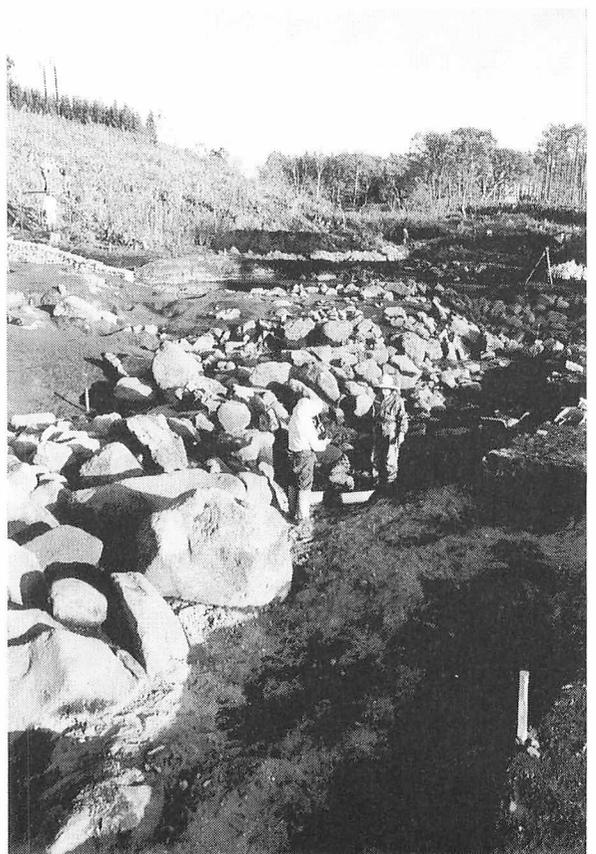
斜面の土壌群



遺物出土状況 (P-12)



氾濫原に形成された焼土



段丘崖 (右側は縄文中期の氾濫原)

滝里遺跡群（滝里10遺跡・滝里11遺跡・滝里31遺跡）

事業名：石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

発掘期間：平成5年5月6日～10月28日

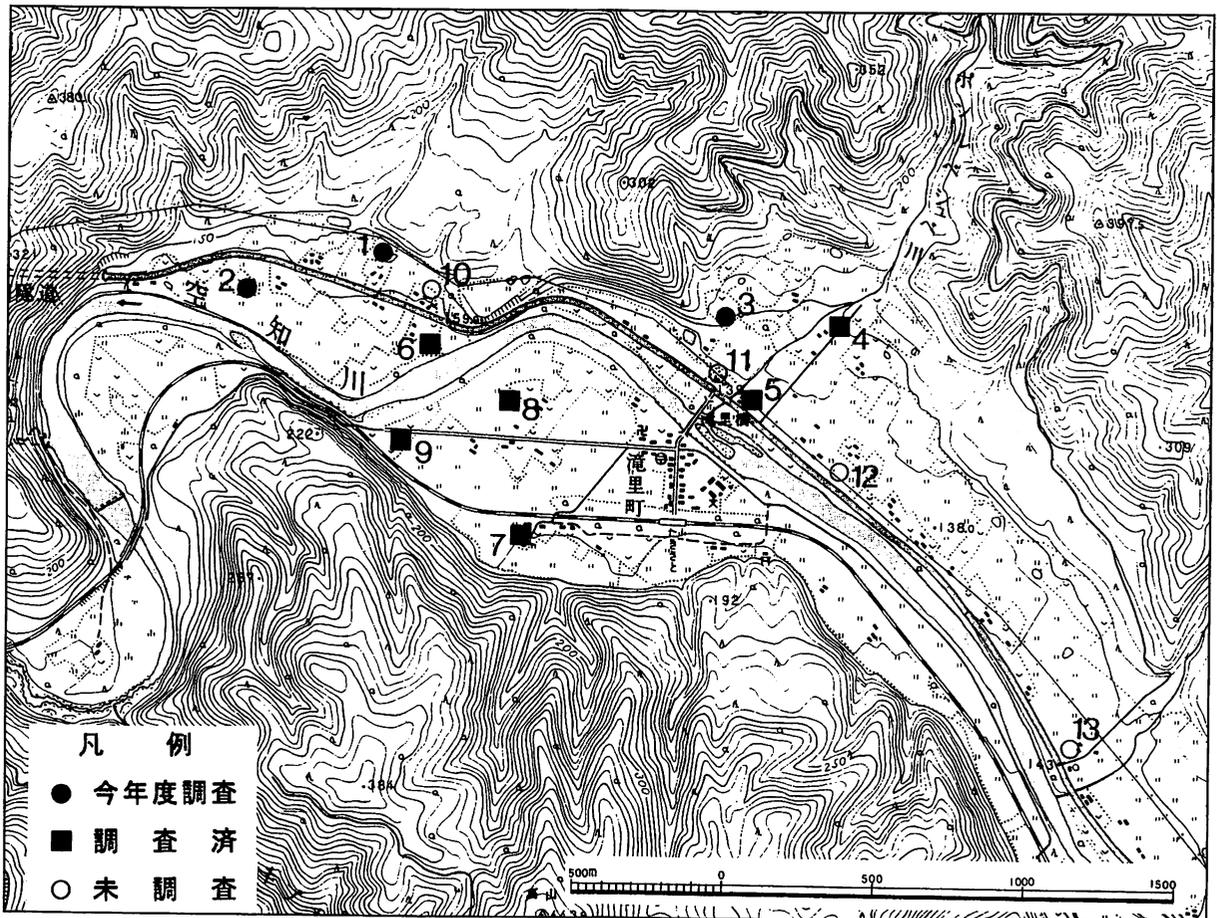
調査員：佐川俊一、田中哲郎、澤田 健

この調査は、北海道の中央部を流れる空知川中流域で工事中の滝里ダム建設に伴うものである。このダム建設によって水没するために、発掘調査を必要とする遺跡は計20ヵ所以上におよんでいる。これらの遺跡は空知川によって形成された谷あいの河岸段丘上と、これに続く沖積錐上に立地している。調査は平成元年度から始まり、昨年度までに6ヵ所の遺跡について発掘が完了している。これまでの調査では、おもに縄文時代晩期後半の遺構と遺物が検出されている。

本年度は空知川右岸にある3ヵ所の遺跡を調査した。総発掘面積は24,116㎡である。上流側から順に、滝里31遺跡、滝里10遺跡、滝里11遺跡が位置している。標高は約130～161m。このうち、滝里11遺跡は昨年度から継続して調査したものである。

いずれの遺跡もダム建設用地になる前までは、水田や畑あるいは宅地などとして利用されていたところである。かつて行われた水田造成などのため、遺構や遺物の残存状況はあまり良好ではない。

以下、今年度の調査結果について、概要を記す。



遺跡の位置	1. 滝里10	2. 滝里11	3. 滝里31	4. 滝里7	5. 滝里32	6. 滝里33	
	7. 滝里23	8. 滝里38	9. 滝里39	10. 滝里9	11. 滝里安井	12. 滝里4	13. 滝里12

滝里10遺跡 (E-04-13)

所在地：芦別市滝里町267-1 ほか

調査面積：9,920㎡

遺跡の概要

本遺跡は標高約140～151mの沖積錐上に立地している。水田の造成により土地の改変がかなり進んでおり、旧地形は元住宅地周辺および旧国有林地などにわずかに残るのみであった。遺物包含層は黒色腐植土であるが、トレンチ調査を行ったところ、標高143mより低い部分では厚い砂礫層の下にもぐり込んでおり、遺構・遺物は検出されなかった。土壌が集中して検出された区域では、東側に調査区を拡張して遺構の確認を行ったが、新たな土壌は検出されなかった。これらの結果、当初9,200㎡を予定していた調査面積は上記のとおりとなった。

本遺跡が立地する沖積錐を構成する砂礫層は、西側を流れる沢を供給源としており、氾濫による砂礫層と、植生の発達による黒色腐植土層の堆積が繰り返され、このような地形になったものと考えられる。沖積錐のうち低い部分では黒色土の流出した部分が認められ、遺跡が形成された時期には、間断なく水が流れる沢があったことを示している。

遺構と遺物

検出した遺構は土壌24基、ほかにフレイク・チップの集中地点が4か所あった。出土遺物は縄文時代晩期後半のものが主体である。水田の盛土下に土器片が集中して出土したところもある。

土壌のプランは円形・楕円形・長楕円形の3種があるが、規模はさまざまであり、長軸方向の統一性も見られない。覆土中、あるいは墳底の如何にかかわらず、これらの土壌から出土した土器片は、おもに縄文時代晩期後半のものである。

土壌P-3では覆土上部から、50点あまりの黒曜石製の有茎鏃がベンガラとみられる赤褐色土中に混じって検出された。さらに、壁際に黒曜石の剥片229点が径20cmほどの範囲にまとまって出土した。P-8は内部に礫が充填されており、覆土上部から黒曜石製の有茎鏃が50数点と、礫に混じって矢柄研磨器が2点出土した。ほかに、土壌から出土した遺物はP-20の覆土中およびP-21の墳底から出土した石斧、P-12の覆土から出土した土器片や黒曜石の大型剥片などである。

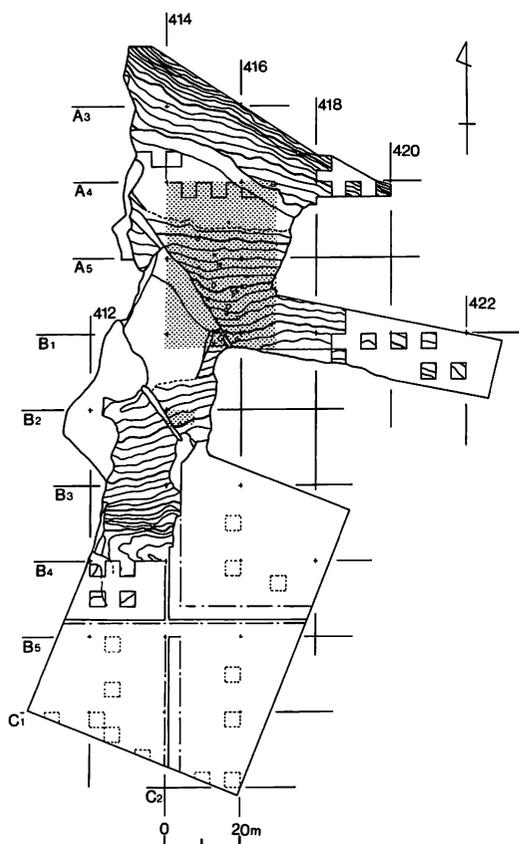
これらの土壌は、出土遺物から縄文晩期後半の遺構と推定される。墓墳として構築された可能性が考えられるが、さらに検討が必要である。

フレイク・チップの集中地点は、A4ライン以北の旧地形を残した部分で2か所、沢の周辺で2か所が検出された。石器づくりの作業場であった可能性があろう。

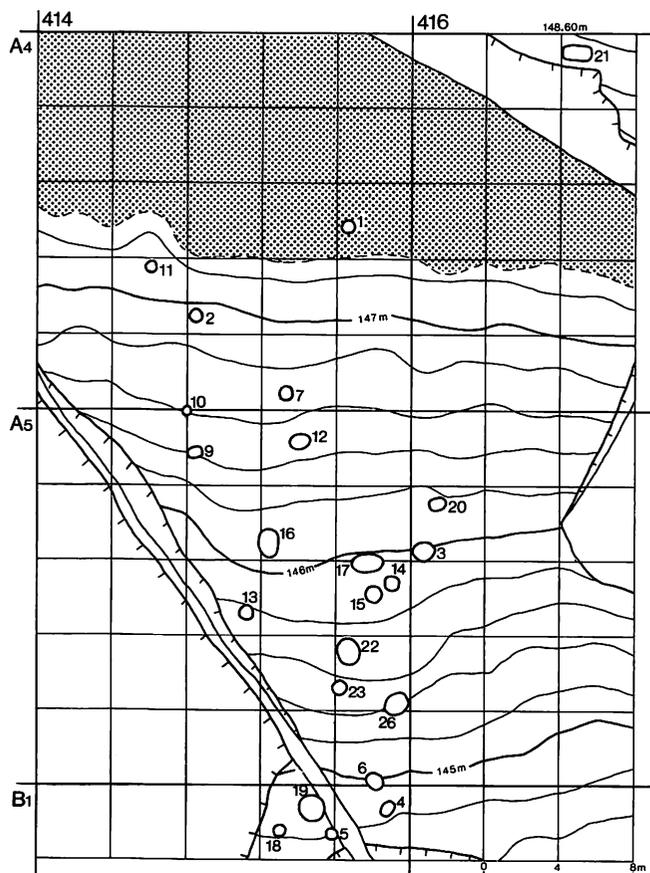
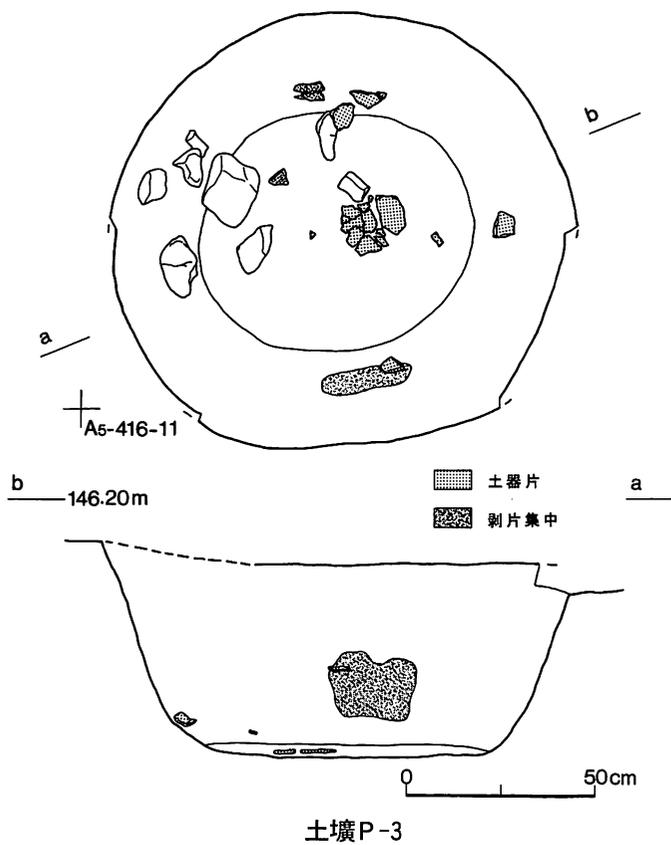
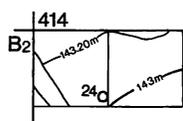
出土遺物点数は約48,000点である。このうち土器片は約10,000点、その大半は縄文晩期後半のものである。ほかに、縄文時代中期と後期のものが、標高の高い所で出土している。

石器のうち、剥片石器は石鏃とスクレイパーが多くを占めている。とくに石鏃は完形品が500点を超える。このうち有茎鏃は、土壌から出土したものを含めて300点あまりを占める。二等辺三角形の無茎鏃も100点以上を数える。

このほかに特徴的遺物として、丸のみ形石斧1点、土版2点がある。丸のみ形石斧は縄文時代中期と後期の土器片が多い地区で出土したものである。



調査区の地形



遺構位置図 (網点は耕作により削平されている部分)



土壌群の調査



土壌 P-3



土壌 P-12

滝里11遺跡 (E-04-14)

所在地：芦別市滝里町244-1・247

調査面積：6,700㎡

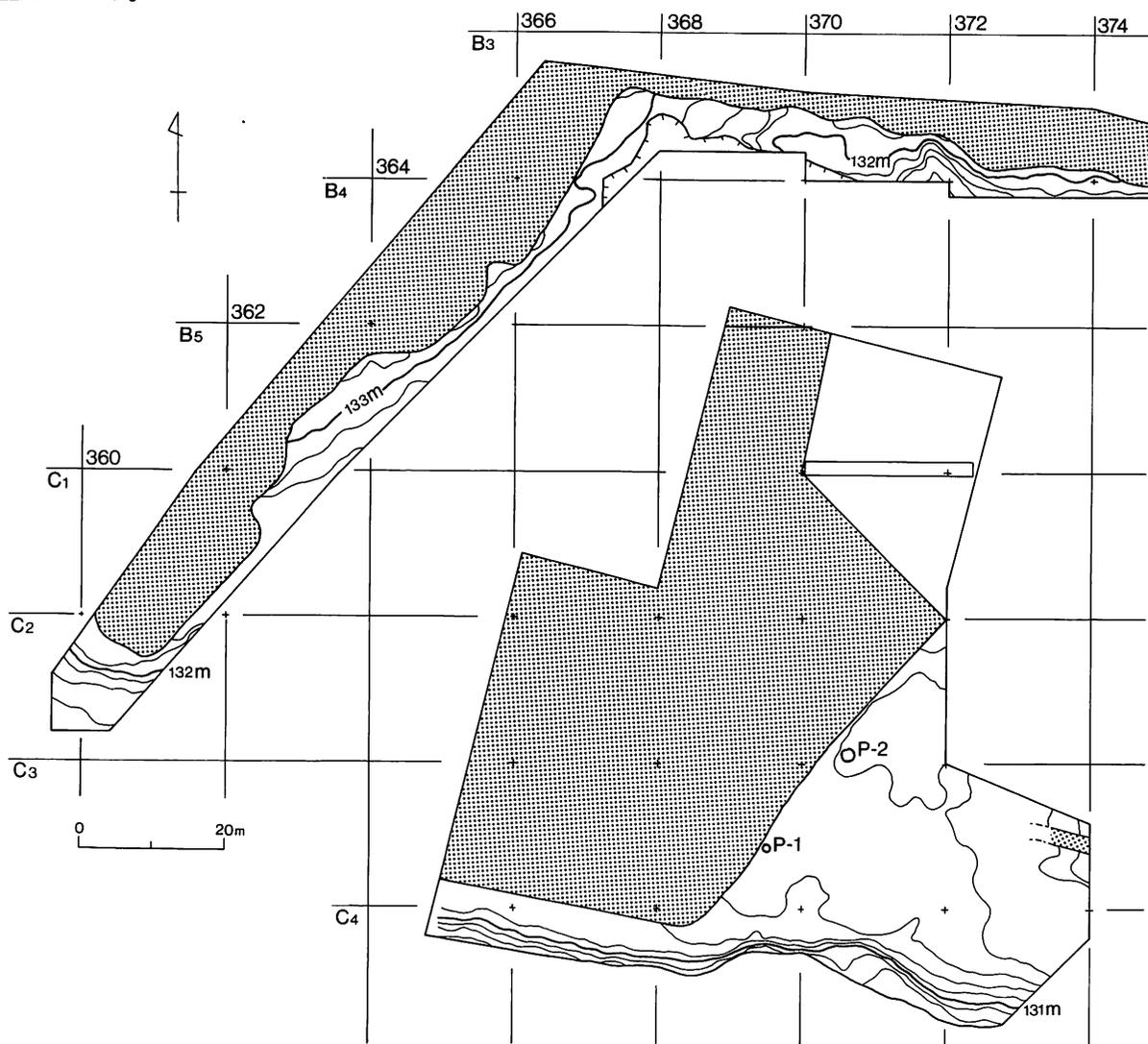
遺跡の概要

本遺跡は標高約130～133mの低位段丘上に立地している。調査対象総面積は8,000㎡、南北の2つの調査区に分かれている。昨年度は南側の調査区の一部(1,300㎡)について発掘を行った。本年度は南側調査区の残りと北側調査区を発掘した。調査区のほとんどは造田により削平されているが、おもに、耕作土から縄文時代前期、中期、晩期の遺物が出土した。

なお、北側調査区はさらに国道下へ続いており、道路切替え後に調査が必要となる。

遺構と遺物

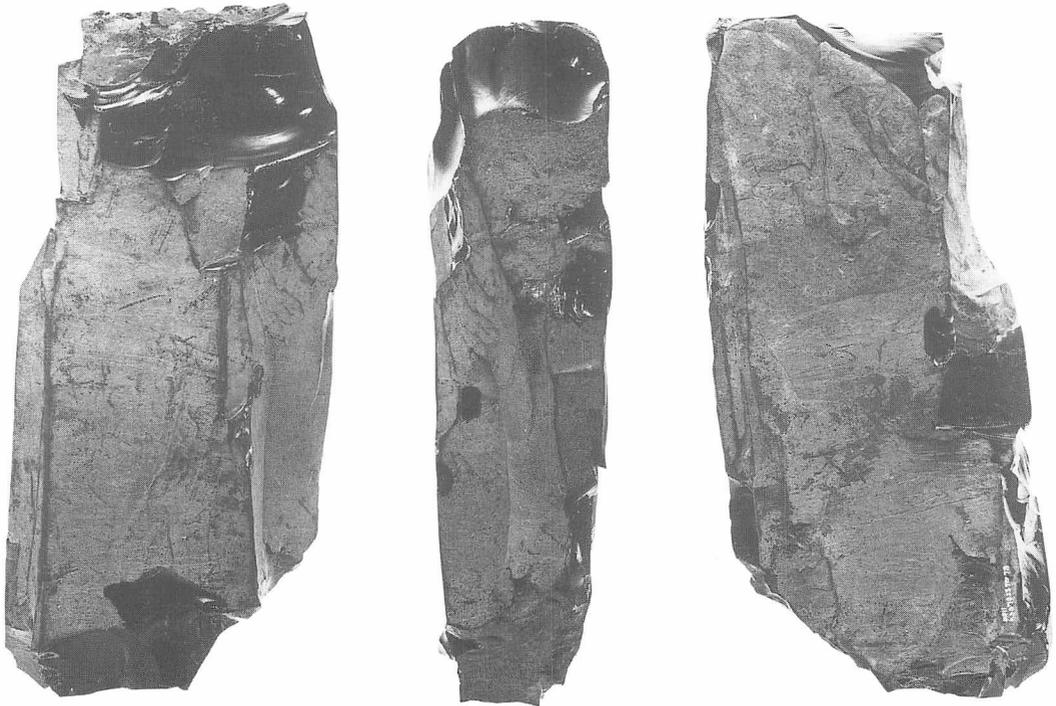
検出した遺構は土壌1基(P-2)である(P-1は昨年度調査)。伴出遺物がなく、時期、性格ともに不明である。このほか、フレイク・チップの集中地点が2ヵ所検出された。出土遺物は約25,000点。このうち、土器片は約1,900点。大半は黒曜石のフレイク・チップである。土器は縄文時代晩期後半のタンネットウL式が多い。ほかに前期後半の植苗式相当、中期の柏木川式相当の土器などが出土している。



調査後の地形と遺構の位置 (網点は耕作により削平されている部分)



調査区全景



黒曜石石核(高さ23.5cm)

たきさと
滝里31遺跡 (E-04-79)

所在地：芦別市滝里町288-2

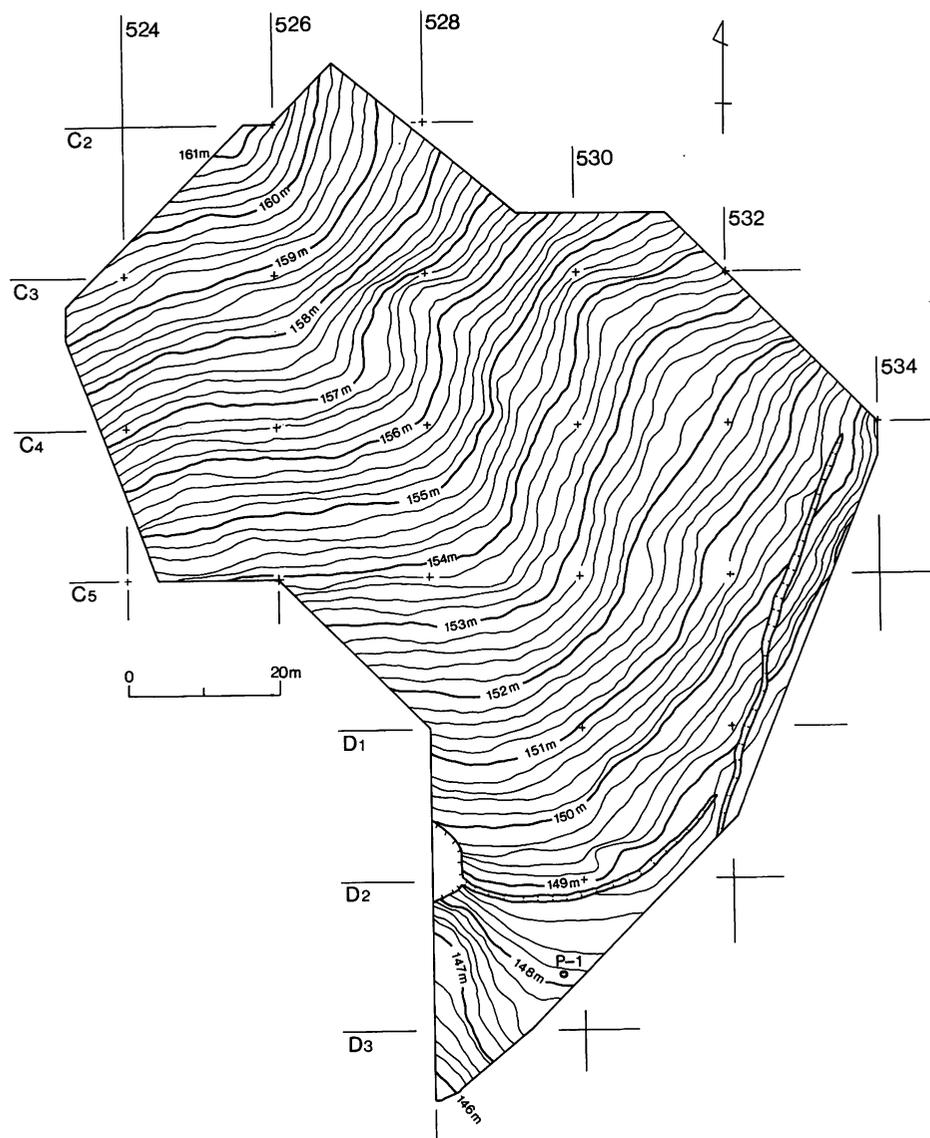
調査面積：7,496㎡

遺跡の概要

本遺跡は標高約146～161mの沖積錐上に立地している。地形は北西から南東に下る斜面になっており、調査前まではおもに畑として利用されていた。昭和62年度に北海道教育委員会によって行われた範囲確認調査では遺物が出土していないが、立地条件等から遺跡と判断され、発掘調査の対象となったものである。調査予定面積は当初9,740㎡であったが、遺構と遺物がほとんどないものと判断される範囲があったため、2,200㎡あまり減少した。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代後期と晩期の土器片および石器が出土したが、遺物の分布は全体に希薄であった。検出した遺構は、縄文時代晩期後半の土壇 (P-1) 1基である。出土遺物は約6,400点。このうち土器片は縄文時代後期初頭の余市式、晩期後半のタンネットウL式など約1,700点である。また、有舌尖頭器とみられる黒曜石製の石器が2点出土した。水和層による年代測定を依頼中である。



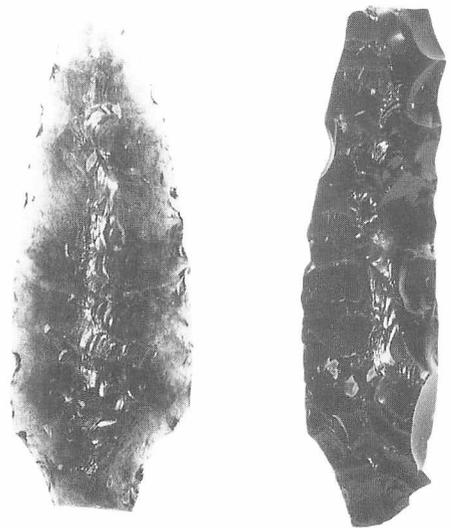
調査後の地形



調査区全景



土壤 P-1



0 5cm

有舌尖頭器

オサツ2遺跡 (A-03-14)

事業名：都地区道管畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道石狩支庁

所在地：千歳市都268-1地先ほか

調査面積：650 m²

発掘期間：平成5年5月6日～10月30日

調査員：鬼柳 彰、田才雅彦、鈴木 信

遺跡の概要

オサツ2遺跡は、千歳市北部を流れる長都川^{おさつ}の河口から約1km上流右岸に位置している。対岸には並行して調査した、ユカンボシC2遺跡がある。調査区は本遺跡の西端部で、改修前の長都川岸斜面とこれに続く低位段丘上平坦部にあたる。長都川の両岸には約20ヵ所の遺跡が分布しており、縄文時代からアイヌ文化期に至る各時期の遺物が採集されている。本遺跡の北側にあるオサツ1遺跡とオサツ3遺跡には、防風林中に擦文時代の竪穴住居跡とみられる窪みが20ヵ所ほどあり、三つの遺跡は連続して、大規模な集落跡を構成しているものと考えられる。

昨年度は調査区南半部を発掘して、擦文時代の竪穴住居跡14軒を検出した。さらに旧石器時代の遺物や縄文時代の土壌とTピット（落し穴）、続縄文時代およびアイヌ文化期の墓壇のほか、多数の杭跡や焼土などが見つかっている。また、旧長都川岸にあたる低湿地のトレンチ調査では、擦文時代以降のものとみられる木製品（中柄、櫂、杭など）が出土した。

今年度は調査区北部の平坦部および南部の川岸斜面の一部を発掘した。低湿地の大部分は未調査であるが、来年度中に発掘を完了する予定である。



遺跡の位置 (1. オサツ2遺跡 2. ユカンボシC2遺跡)

遺構と遺物

〈旧石器時代〉 2・14区で検出された焼土は遺物を伴っていないが、IV層上面にあることから旧石器時代の遺構と推定される。付近では同じ層位から細石刃とすり石が出土している。

〈縄文時代〉 調査区北部に集中して、24軒の竪穴住居跡が発掘された。ほかに土壇11基、Tピット2基、焼土5ヵ所がある。住居跡の内部から出土した土器は、中期後葉の柏木川式から後期初頭の余市式までの継続が見られ、およそ6群に分けられる。北筒式土器は含まれていない。住居跡のプランは円形から隅丸三角形を経て、隅丸台形へと変化している。Tピットのうち1基は、柏木川式土器を伴出した竪穴住居の構築時の掘りあげ土によって、埋められていた。

〈続縄文時代〉 墓壇3基を調査した。G6では壇底から後北式土器1個体と砥石1点のほか、石斧、石鎌、剥片などが多数検出された。G8でも覆土中から後北式土器1個体が出土している。

〈擦文時代〉 竪穴住居跡6軒を調査した。HP19は一辺約9mに達する大型の住居跡である。HP23は小型で、カマドがない。2ヵ年度の調査により、20軒の竪穴住居跡を調査したが、覆土中の火山灰のあり方や伴出した土器などから、3時期に分かれるものと考えられる。HP23の覆土中とHP19の北側では鍛冶遺構が発見された。ともにフィゴの羽口が出土、後者では鍛造剥片が多量に見つかっている。

〈擦文時代以降〉 旧長都川の岸に密集する400本以上の杭跡を検出した。木杭の先端部が残っている例もある。2ヵ年の調査で検出された杭跡は約1,300本になる。



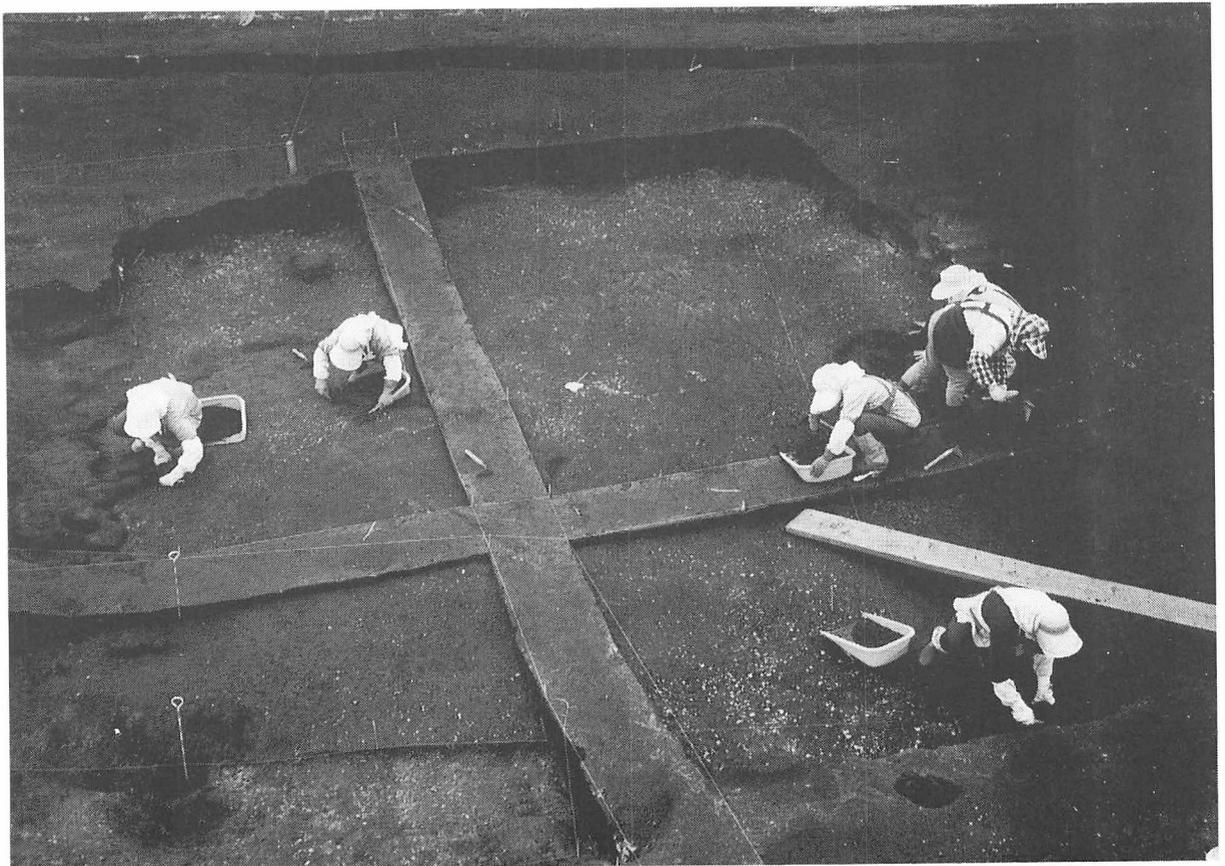
縄文時代の竪穴住居跡



調査状況



土壌 P6



擦文時代の竪穴住居跡 H19

ユカンボシC2遺跡 (A-03-04)

事業名：長都地区道営畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道石狩支庁

所在地：千歳市長都 216-10ほか

調査面積：2,710㎡

発掘期間：平成5年6月1日～10月30日

調査員：鬼柳 彰、田才雅彦、鈴木 信

遺跡の概要

本遺跡は長都川の支流ユカンボシ川の下流右岸にある。調査区は合流点の南西側に接しているが、いずれも改修された河道で、ユカンボシ川は本来ここから約500m北東で長都川に注いでいた。調査区南端部は、かつて長都川に入っていた小川の岸にあたり、多量の湧水があった。

恵庭市街地南部に水源をもつ全長約6.5kmのユカンボシ川の両岸には、二十数ヵ所の遺跡が残されている。千歳市教育委員会はユカンボシ川の改修工事などに伴い、昭和63年度から平成3年度までに6ヵ所の遺跡を調査した。この一連の調査では縄文時代早期から擦文時代、アイヌ文化期に至る遺構や遺物が発掘されている。本遺跡の主体部にあたる西半部でも擦文時代の集落跡が調査されている。

遺構と遺物

発掘された遺構は竪穴住居跡10軒、土壌4基、Tピット39基、焼土10ヵ所のほか、掘立柱建物跡2軒を含む多数の柱跡と杭穴である。

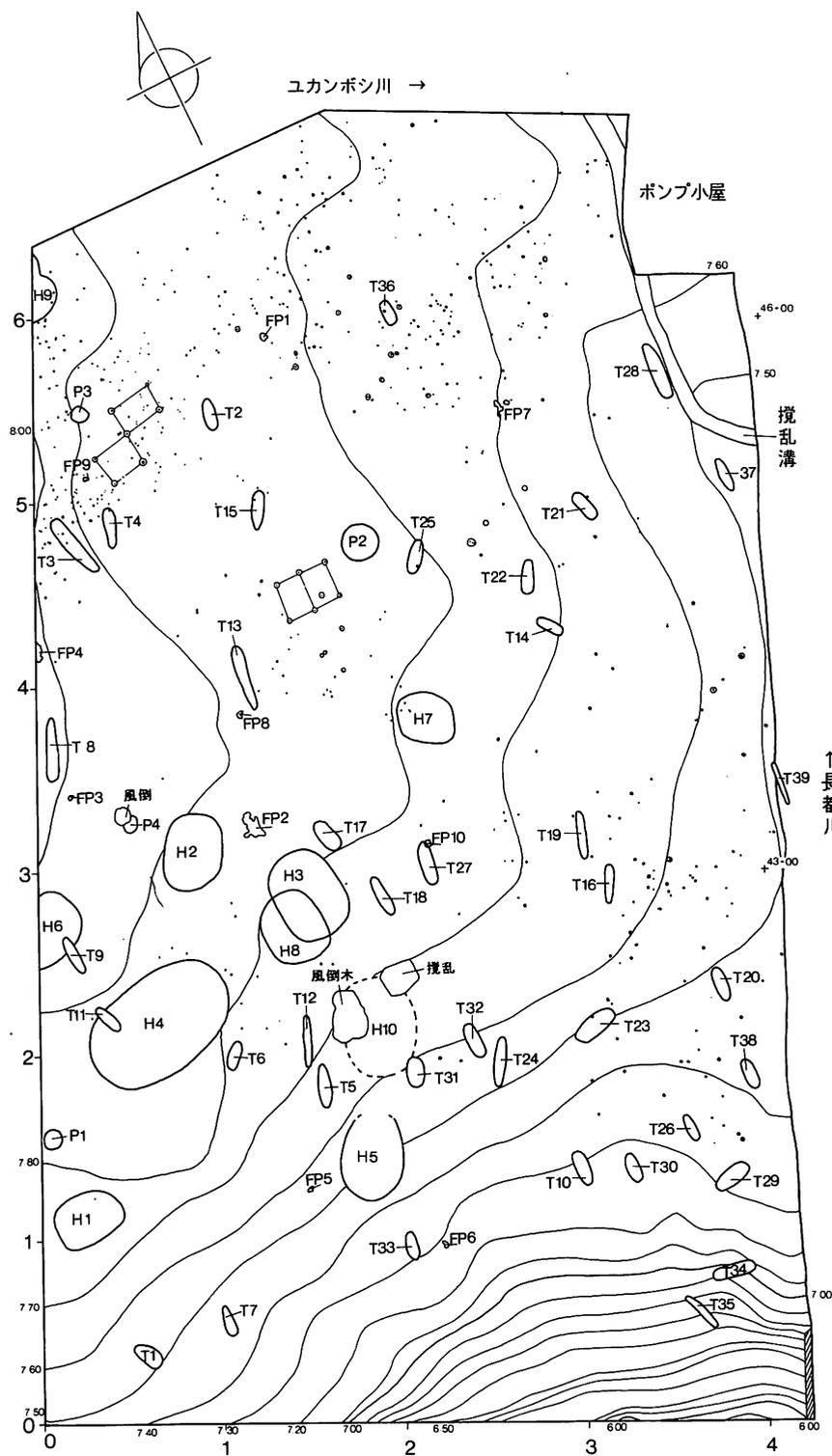
竪穴住居跡のうちH3・7・9を除く7軒は、縄文時代早期コッタロ式土器の時期のもので、大型のH4（長径約8.5m）を取り巻くように位置している。H2～4では多量の剥片類が出土した。H



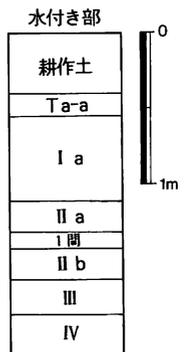
空中写真 (○印 ユカンボシC2遺跡、昭和22年撮影)

凡例

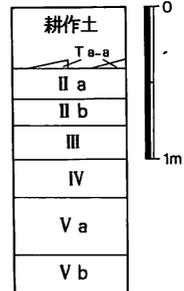
- H 1~10: 竪穴
- P 1~5: 土壇
- T 1~39: Tピット
- FP 1~10: 焼土
- ◎: 掘立柱
- : 杭穴



土層柱状図



段丘部



土層注記

- Ta-a: 樽前 a 降下軽石堆積物
- I a: 黒褐色~暗灰色粘質土
- II a: パミスを含む黒色土
- I 間: 暗黄褐色を呈す。草本と Ta-c₂ 層
- II b: パミスを含まない黒色~黒褐色土
- III: 褐色~暗黄褐色土
- IV: 黄褐色土
- V a: 灰黄褐色砂
- V b: 黄褐色大粒火山灰 (水付き部では赤化もしくは黒化)

遺構位置図

3は東釧路Ⅲ式期の住居跡で、H8に切られている。H7は伴出遺物がなく時期不明である。炉や柱穴も検出されなかった。H10は、昭和63年度に千歳市教委が調査したⅡH-1の続きで、東釧路Ⅲ式期のものと思われる。

P1とP2は、いずれも漏斗状の形態をもつ土壌で、樽前a降下軽石層（Ta-a・1739年降下）以前に造られている。人工遺物はないが、フローテーションによりP2壙底の土から、キハダの種子が比較的まとまって検出された。P3はいわゆるフラスコ状ピットである。口径約1m、底径0.9m、くびれ部の径0.6mで、確認面からの深さ1.5mを計る。壙底では水が湧く。P4は縄文時代早期のもので、土壙内外から多量の剥片類が出土している。

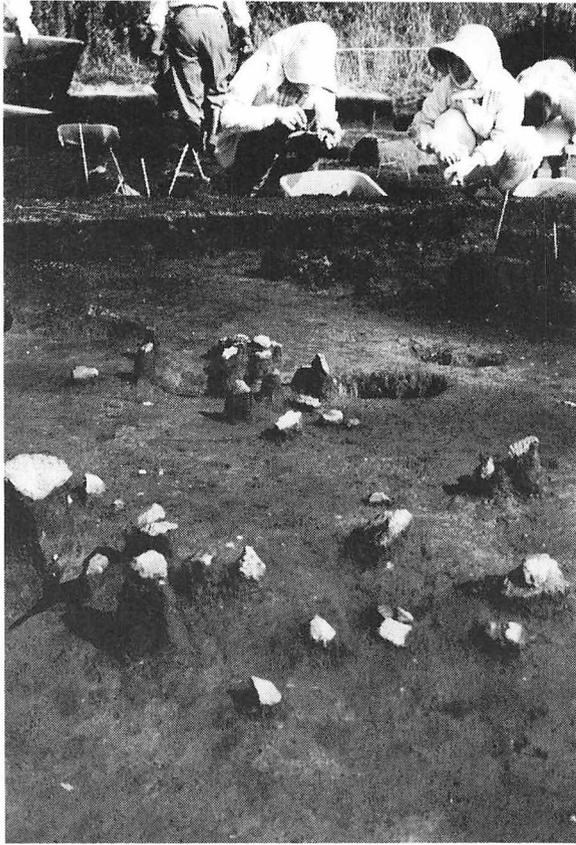
Tピットは長短さまざまであるが、2基ないし3基単位で列をなすようである。杭穴をもつものは発見されていないが、湧水のため確認できないものも多かった。

焼土は各層、各時期のものが散点的に検出されている。

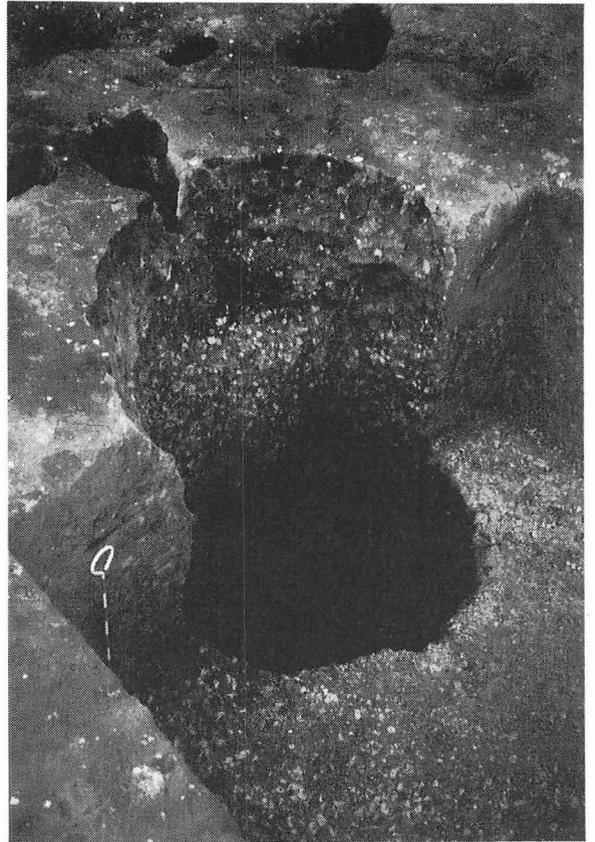
掘立柱跡は37本あるが、建物跡の配列が確認できたものは2軒で、このほかは配列が明確ではない。杭穴は総数537本が検出されており、うち22本では杭先の木質部が残っていた。埋土にTa-aを含むものと含まないものがあり、杭穴にも時間差があることが分かる。出土遺物は土器片が約12,000点、剥片石器604点、礫石器類640点、剥片が約27,000点の計40,000点あまりである。分布密度は土器・石器とも、調査区中央部の竪穴住居が集中している付近が濃くなっている。土器は縄文時代早期のコッタロ式が多くを占め、次いで東釧路Ⅲ・Ⅳ式、中茶路式が多い。後期の余市式、続縄文時代前葉の土器、擦文式土器も出土している。ほかに、コッタロ式土器片を利用した土製円盤がある。剥片石器は、石鏃と加工痕のあるフレイクが約4分の1ずつを占める。礫石器では石斧とすり石が多く、たたき石、石皿、台石などもある。カンラン岩製の垂飾が1点出土している。



調査状況 中央は竪穴住居跡H4



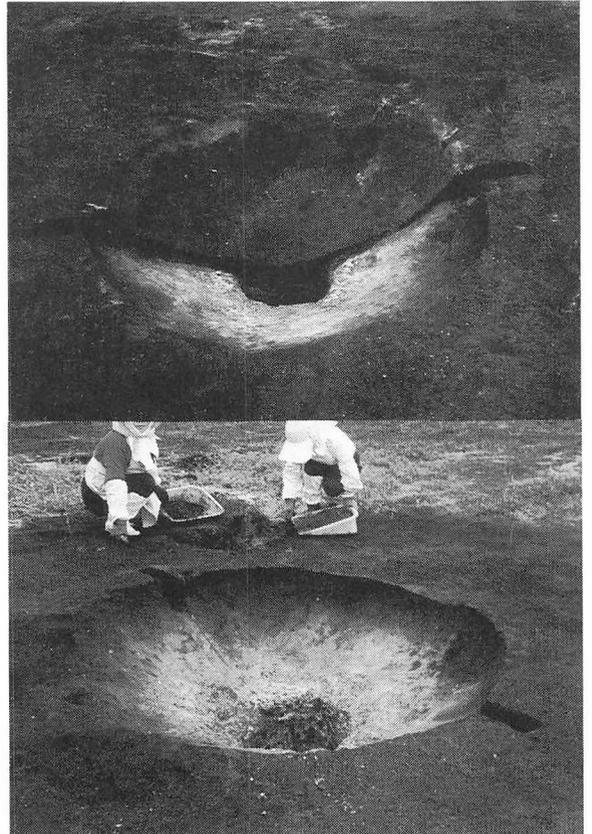
土器出土状況



フラスコ状ピットP3



Tピットの調査



漏斗状の土壌P2

たかおか
高岡1遺跡 (J-05-17)

事業名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団札幌建設局

所在地：虻田郡豊浦町字高岡63-1 ほか

調査面積：4,090㎡

発掘期間：平成5年5月6日～10月29日

調査員：西田 茂、立川トマス、藤原秀樹

遺跡の概要

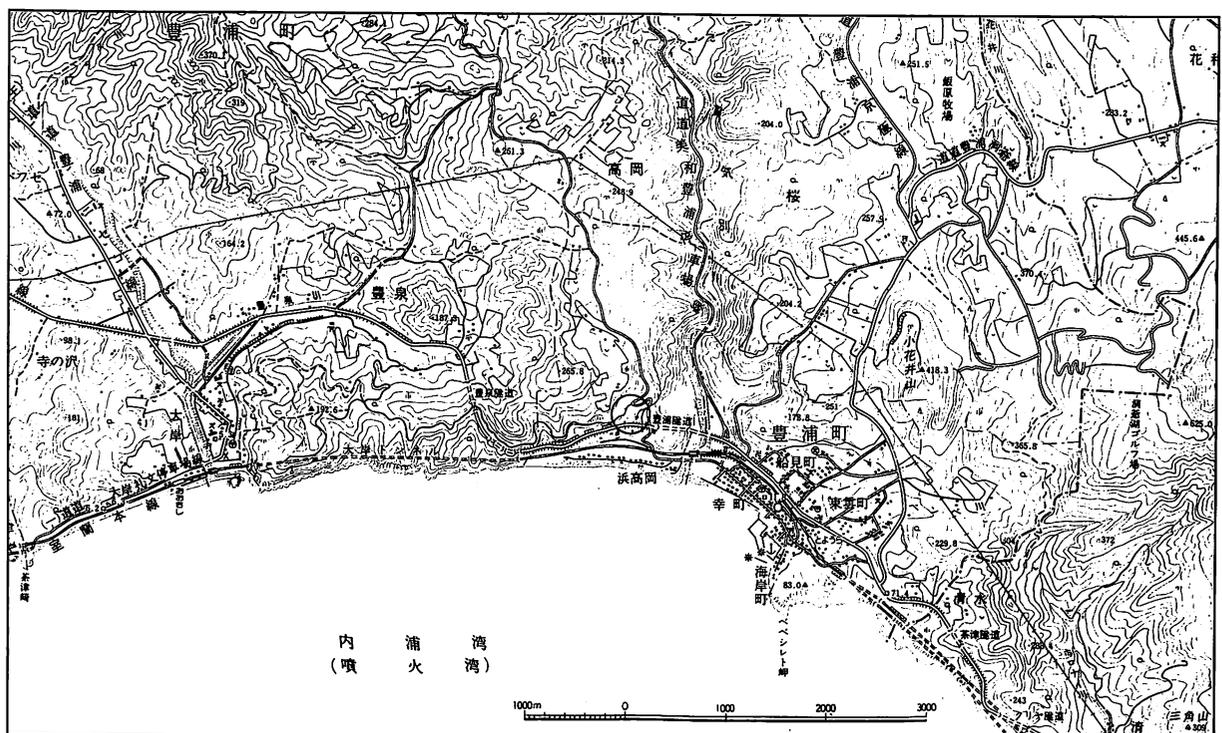
高岡1遺跡は豊浦町市街地の西方約1.5kmにある。内浦湾（噴火湾）に向かって落ちこむ崖錐堆積物の斜面のうち、比較的ゆるやかなところに立地している。道路用地になる前は、おもに畑として利用されていた。調査区域のなかを古別川と呼ばれる小川が、急流となって北から南へ下っている。調査にあたって、古別川の東側（左岸）を川東地区、西側（右岸）を川西地区と呼称した。

【川東地区】調査予定範囲の東辺に幅15～20mの町道が南北に走り、北辺には私道が東西に延びている。今回の調査では、これらの道路部分を除外した。標高は25～34m、地形は北に高く、南に低い。西側には古別川の下刻作用による急傾斜が認められる。

調査区のほぼ全域に、耕作による地表部分の土層攪乱が見られた。ほぼ中央には、東西に延びる上水道管の埋設にともなう幅80cm、深さ1mの攪乱溝があり、南辺部分は30年ほど前に操業していた砕石工場造成時の削平を受けていた。

土層の区分は次のように行った。Ⅰ層：耕作表土、盛り土。Ⅱ層：黒色腐植土。Ⅲ層：褐色土。Ⅳ層：灰褐色粘質土。Ⅴ層：黄褐色火山灰（幌別火山灰）。Ⅵ層：黒色～黒褐色土。Ⅶ層：暗褐色土。Ⅷ層：褐色土（岩礫混じり）。

遺物はⅠ・Ⅱ層からも出土するが、本来の遺物包含層はⅢ層・Ⅳ層（続縄文時代～縄文時代早期）およびⅥ層・Ⅶ層（縄文時代早期）である。



遺跡の位置 (○印)

【川西地区】調査予定範囲の南辺に沿って、幅15~20mの範囲を調査した。東西に細長い調査区のために地形図では明瞭でないが、南に傾斜している。標高は約25~37m。

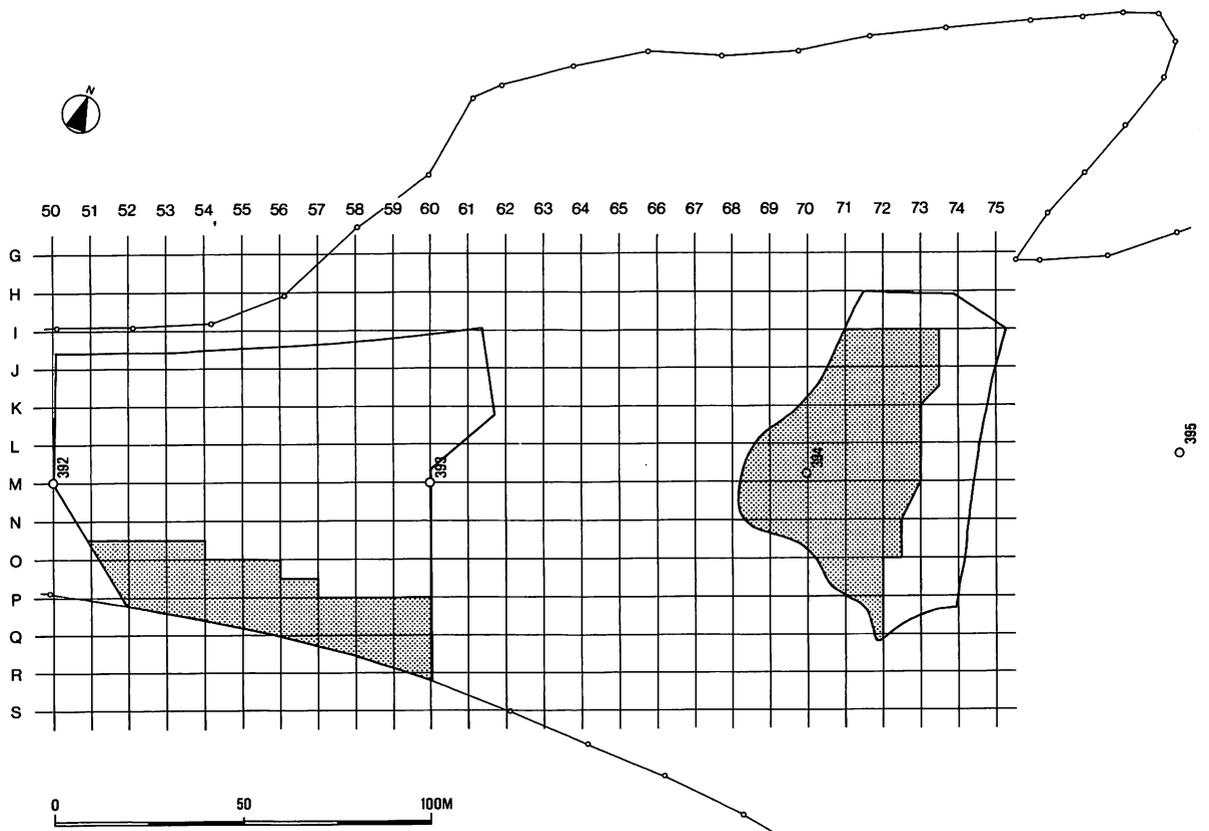
調査区の地表は、ほぼ全域が耕作による攪乱を受けている。発掘の結果、調査区内東側に南へ開いた沢地形が認められた。南辺部分の土層は下水道管埋設や私道造成などにより攪乱、削平を受けていた。このため、本来の遺物包含層を確定するにはいたらなかった。

遺構と遺物

【川東地区】発掘された遺構は竪穴住居跡6軒、土壇5基、焼土2ヵ所である。石組み炉が検出された住居跡H-2とH-5は、縄文時代中期の竪穴住居跡である。H-1・3・4と土壇P-4・5は、V層の黄褐色火山灰（幌別火山灰）よりも下位に検出されており、縄文時代早期の遺構と判断される。P-3は黄褐色火山灰（幌別火山灰）との関係が明瞭ではないが、覆土の2層上面で中茶路式土器の破片が、数個体分まとまって検出されていることから、縄文時代早期の遺構と推定される。

出土遺物は土器片および石器類、合わせて約66,000点である。土器は、アルトリ式（貝殻文平底土器）、東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式など縄文時代早期のものと、サイベ沢Ⅶ式、煉瓦台式、静狩式などの中期のものがある。このほかに少量ではあるが、後期の手稲式、続縄文時代の後北C₁式土器なども出土している。また、縄文時代中期後半のものともみなされる、魚骨回転文の平底土器の破片が出土している。中茶路式土器の破片のひとつには、種子の圧痕（ササ？長さ6.2mm）が認められた。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーなどの剥片石器と石斧、たたき石、台石、すり石、石皿、石鋸、砥石、石錘などの礫石器が出土した。これらの定形的な石器には、形態的な特色があり、土器との対応関係が推定できるものがある。ほかに、中茶路式土器の破片で作られた

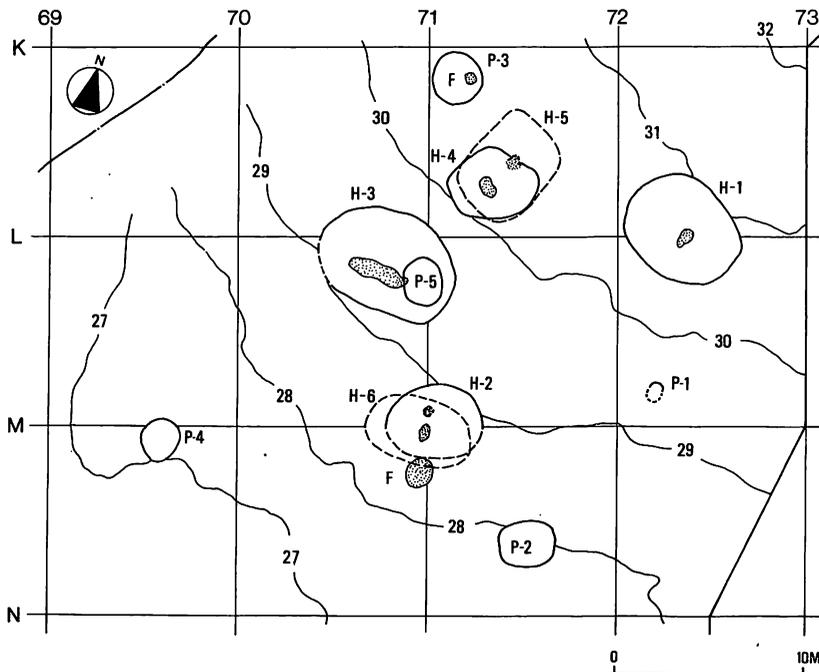


グリッド設定図（網点が今年度発掘範囲）

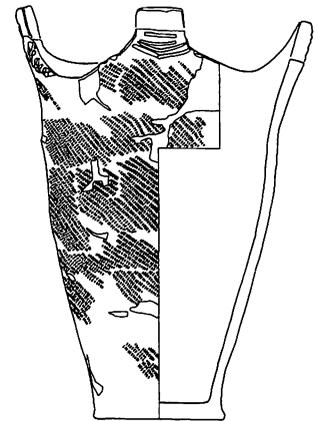
土製円盤、縄文時代中期のものとして推定される石棒、垂飾なども出土している。

黒曜石の礫、残核、フレイク・チップ等は多量に出土している。このうちの大多数は近年、明らかにされつつある原産地、「豊泉群」に含まれるものである。現在、「豊泉群」の黒曜石が容易に採集できる所は、本遺跡の西北方3kmほどを流れる豊泉川の川原である。

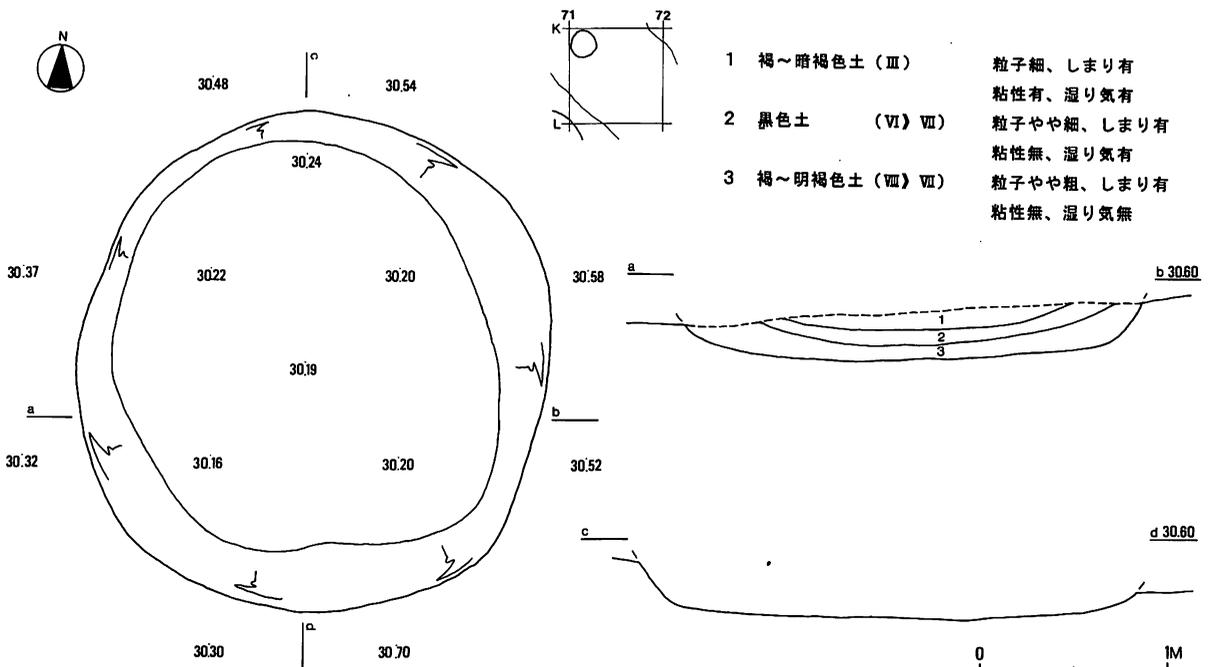
【川西地区】出土遺物は土器片、石器類など約30,000点。土器片の大多数は耕作などによって表面が摩耗しているが、このうち比較的特徴の明らかなものは縄文時代中期後半の時期の土器とみなされる。



川東地区遺構位置図



土器 (川東地区)



土壌 P-3 (川東地区)



調査状況（川東地区）



土壌 P-3（川東地区）



土器出土状況（川東地区）



調査状況（川西地区）



土器出土状況（川西地区）

オサットー1遺跡 (A-03-269)

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団札幌建設局

所在地：千歳市中央730-15ほか

調査面積：1,700㎡

発掘期間：7月29日～9月4日

調査員：千葉英一、皆川洋一、鎌田 望

遺跡の概要

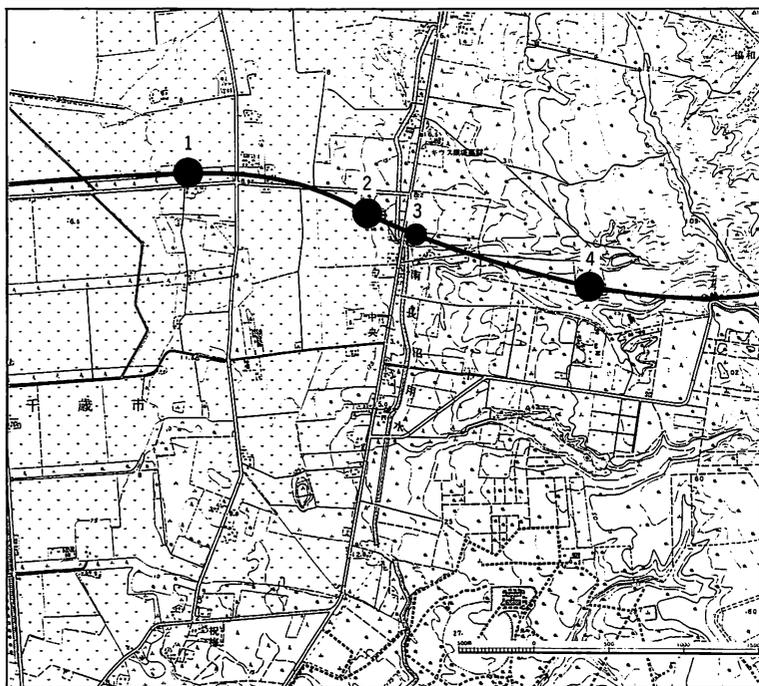
本遺跡は千歳～夕張間の横断自動車道建設予定地において、新たに確認された遺跡である。当初、キウスX遺跡と称したが、今回の調査にあたり改称された。発掘の結果、縄文時代とアイヌ文化期の遺構と遺物が出土した。

千歳市と長沼町の境界付近には、石狩-勇払低地帯の南部にあたる沖積低地が広がっている。かつて千歳川のほか、長都川や祝梅川が流入する長都沼（オサットー）が存在していたが、昭和26～44年の国営灌漑排水事業によって耕地が造成され、その姿を消してしまった。本遺跡は旧長都沼東側低湿地の微高地（標高7～9m）に立地しており、遺跡の名称はこれによっている。

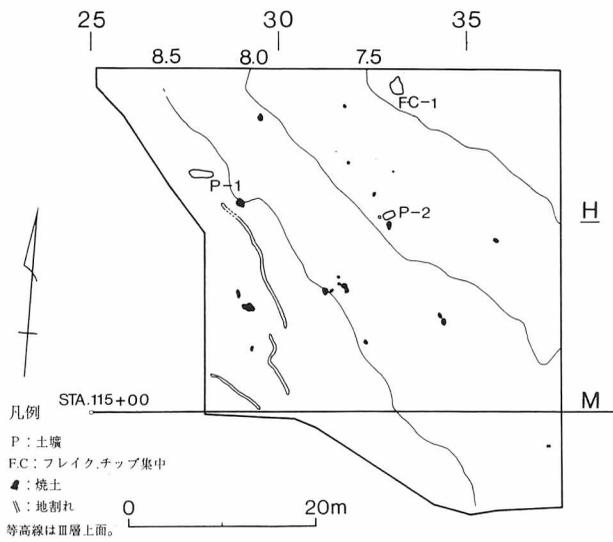
調査前の遺跡の現況は大部分が林地で、一部が畑地であったが、樽前a降下軽石層（Ta-a）下に水成の灰白色粘土層が認められたことから、遺跡の形成期にも周辺は沼あるいは湿地であったことが分かる。遺物包含層はⅢ～Ⅴ層である。Ⅲ層からはアイヌ文化期・縄文時代晩期、Ⅳ層からは縄文時代晩期、Ⅴ層からは縄文時代中・後期の遺物が出土した。Ⅲ層とⅤ層の腐植土層は、それぞれ美沢川流域の遺跡群などで認められる「第Ⅰ黒色土層」と「第Ⅱ黒色土層」に相当する。

遺構と遺物

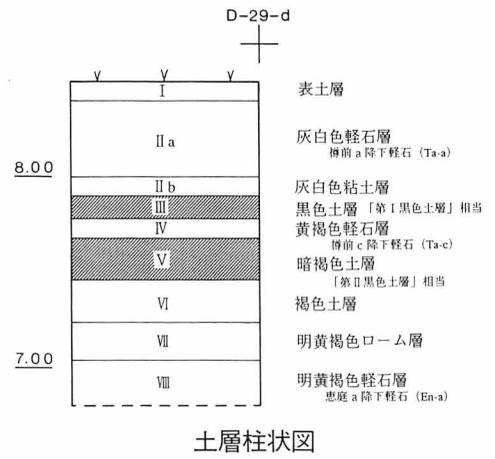
発掘された遺構は土壌墓2基、焼土19ヵ所、フレイク・チップの集中地点1ヵ所である。土壌墓は2基ともアイヌ文化期のものである。このうちP-2の墳底からは刀子が、周囲からは鉄鍋や鉄斧などが出土しており、形態や出土遺物から、アイヌ文化期のなかでも古い段階の土壌墓の可能性はある。焼土はⅢ～Ⅴ層で検出された。縄文時代からアイヌ文化期にわたり、かなりの時間幅が見られる。遺物は土器片24点、石器類685点、金属製品8点の計717点が出土した。土器はいずれも縄文時代中期～晩期の小破片である。石器は磨製石斧が19点と最も多く、石鏃、ポイント、スクレイパー、たたき石、砥石、台石などが各1点ある。ほかに多数の黒曜石のフレイク・チップが出土している。金属製品には鉄鍋、鉄斧、刀子、キセルの吸口などがある。



遺跡の位置 (1. オサットー1 2. キウス4 3. キウス5 4. キウス7)



遺構位置図



土壌墓 P-2



鉄鍋出土状況



石斧出土状況

キウス7遺跡 (A-03-265)

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団札幌建設局

所在地：千歳市中央852-91ほか

調査面積：5,613m²

発掘期間：5月6日～7月15日、9月6日～10月27日

調査員：千葉英一、皆川洋一、鎌田 望

遺跡の概要

本遺跡は千歳～夕張間の横断自動車道建設予定地において、新たに確認された遺跡である。調査の結果、縄文時代早～晩期と続縄文時代の遺構・遺物が多数発掘された。

遺跡は馬追丘陵の西側、コムカラ峠下から西に流れるキウス川の一支流である小さな無名沢の沢頭を取り囲むように立地している。標高は40～46m。北西1.3kmには国指定史跡「キウス周堤墓群」があり、旧長都沼や千歳川の流れる沖積低地に面した丘陵先端部にも多数の遺跡が存在している。

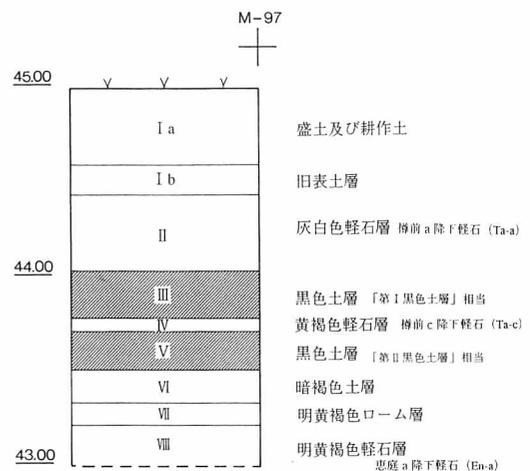
調査は用地買収の進行状況ならびに工事計画に合わせ、二回にわけて行った。一回目は本線とパーキングエリアになる畑地部分を、二回目は北側側道（工事用道路）となる山林部分を調査した。

遺物包含層はⅢ～Ⅵ層である。畑地の造成で一部消失していたほかは、良好な状態であった。Ⅲ層とⅤ層の出土遺物をもっとも多く、Ⅲ層からは縄文時代晩期・続縄文時代、Ⅴ層からは縄文時代早～晩期のものが出土した。これらの腐植土層は、それぞれ美沢川流域の遺跡群などで認められる「第Ⅰ黒色土層」と「第Ⅱ黒色土層」に相当する。今回調査した遺構・遺物の分布は、いずれも未調査区に続いており、次年度以降も調査が行われる予定である。

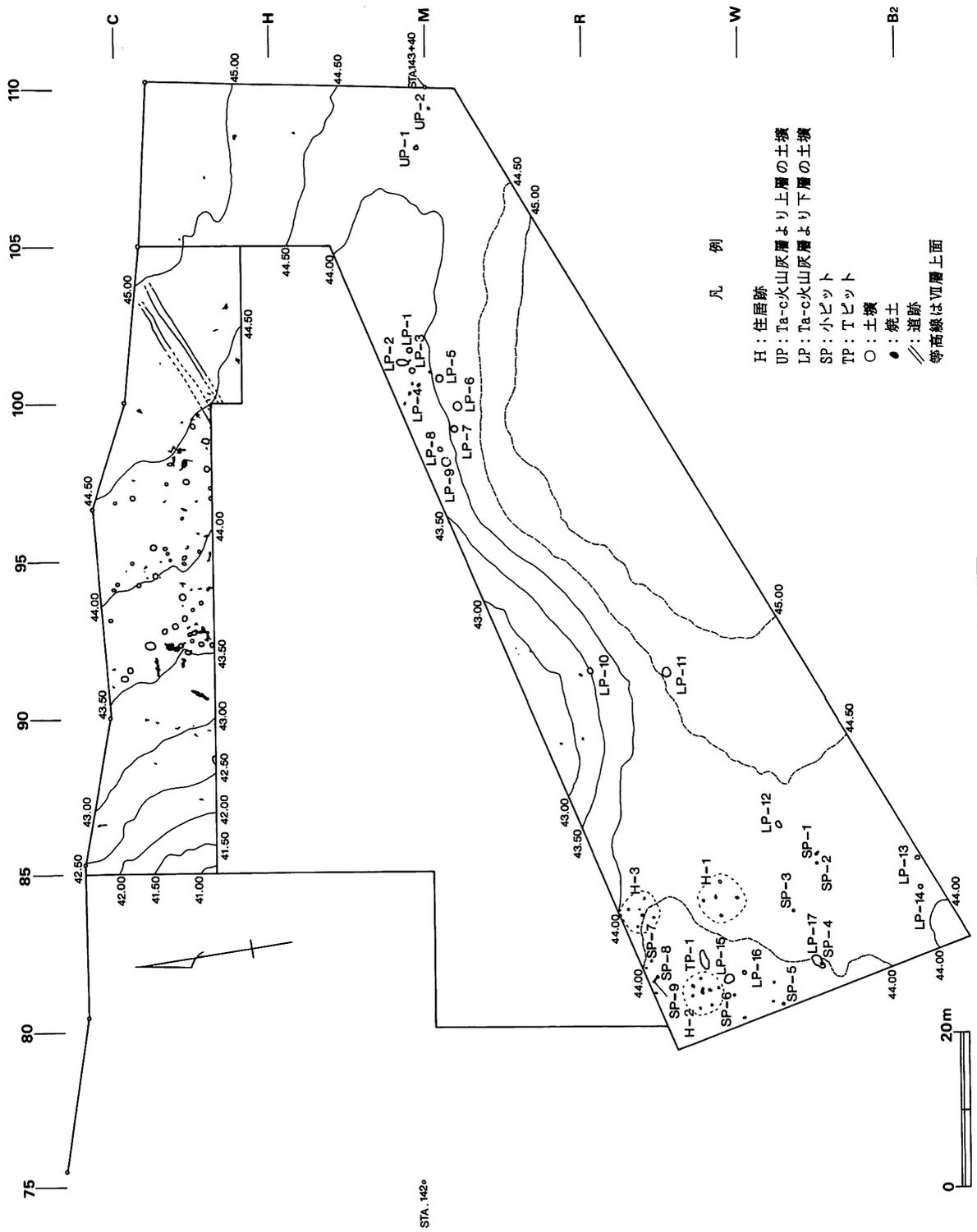
遺構と遺物

遺構は竪穴住居跡3軒、土壇62基、小ピット9個、Tピット1基、焼土82ヵ所、道跡?などが検出された。住居跡は畑地の削平部分から、炉跡と主柱穴跡が確認されたもので、構築時期は縄文時代中期もしくは後期と考えられる。土壇は縄文時代後・晩期および続縄文時代のものがあり、なかでも晩期のタンネットウL式と後北C₂-D式期のものの一部は墓と考えられる。周辺からは焼土と多数の遺物が出土している。道跡?はⅢ層上面で検出されたが、時代・時期は不明である。

遺物は総数約16,000点が出土した。土器片は約12,000点。手稲式、タンネットウL式、後北C₂-D式土器が主体である。これ以外には、縄文時代早期のコッタロ式、中期の柏木川式、後期の余市式などが出土している。石器類は約4,000点、剥片石器には石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、楔形石器など、礫石器には磨製石斧、すり石、たたき石、くぼみ石、砥石、石皿・台石などがある。また、おろし金状や有孔円盤状の土製品、管玉などの石製品も出土している。



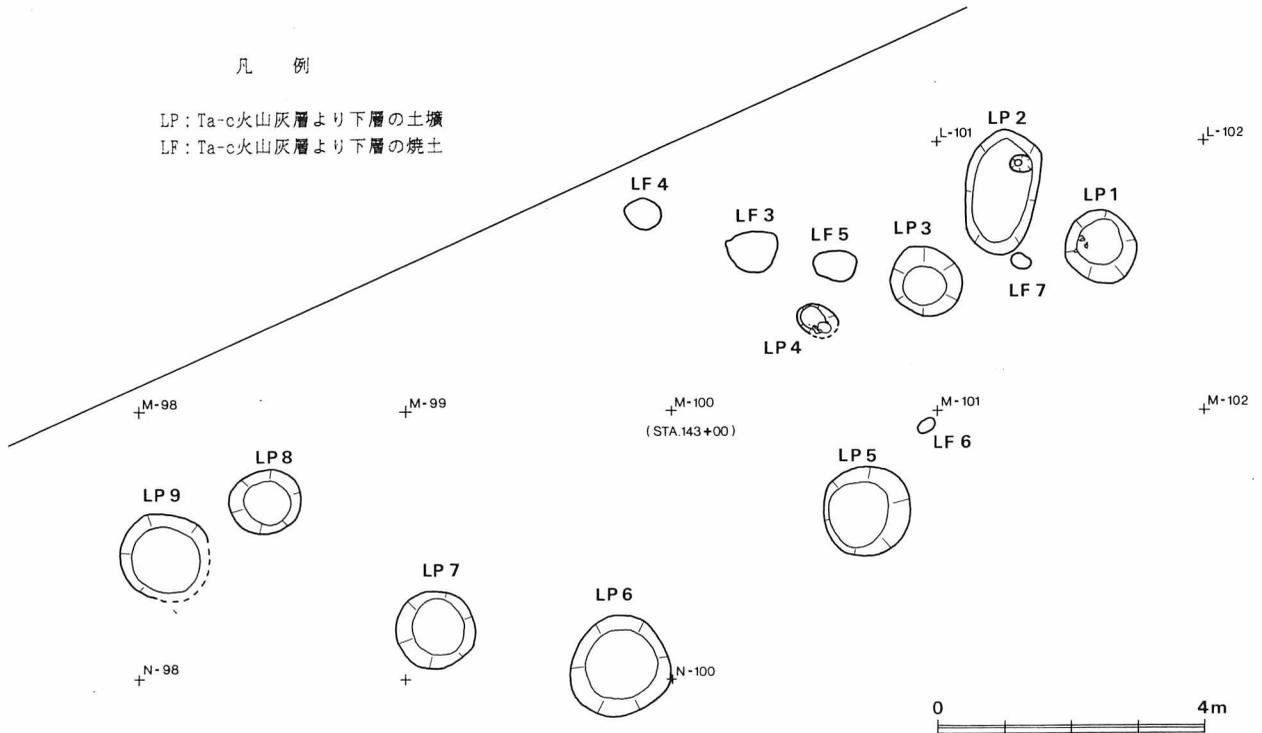
土層柱状図



遺構位置図

凡 例

LP: Ta-c火山灰層より下層の土壌
 LF: Ta-c火山灰層より下層の焼土



縄文時代晩期の遺構



縄文時代晩期の土壌群



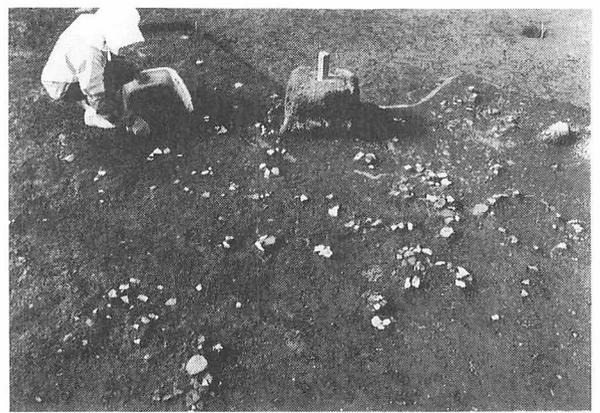
竪穴住居跡 H-1の柱穴



続縄文時代の土壇墓



縄文時代後期の土器



続縄文時代の土器出土状態



続縄文時代の土壇群

3 研修・研究会等

(1) 研修・研究会参加

- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者研修
 - 「環境考古課程」 佐川俊一 11月24日～12月10日
 - 「鑄造遺跡調査課程」 越田賢一郎 2月3日～8日
- 同上講師派遣
 - 田口 尚「千歳市美々8遺跡の調査と環境」 12月1日
 - 三浦正人「チャシ調査例(1)」 2月18日
- 国立歴史民俗博物館共同研究
 - 「中世食文化の基礎研究」共同研究員 越田賢一郎
- 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（京都市） 10月21・22日
 - 参加者 井島紀雄・菅野 聡・熊谷仁志・田中哲郎
- 池田町考古学セミナー（池田町） 7月23日
 - 講 師 西田 茂「縄文時代早期の北海道」
- 第6回 特別展「縄文人の世界」 10月9日
 - 講 師 森田知忠「縄文時代の墓制」
- 現代アイヌの木彫文化展（二風谷アイヌ文化博物館） 10月24日
 - 講 師 森田知忠・田口 尚「北海道における木製品の系譜」
- 北方民族博物館フォーラム「アイヌ文化の成立を考える」 12月2日
 - 発表者 越田賢一郎「鍋と玉」
- 南北海道考古学情報交換会（戸井町） 12月4・5日
 - 発表者 工藤研治 「上磯町 茂別遺跡」
 - “ 谷島由貴 「函館市 中野B遺跡」
 - “ 西脇対名夫「七飯町 鳴川右岸遺跡」
 - 参加者 村田 大・倉橋直孝
- 北海道考古学会発掘調査報告会（札幌市） 12月11日
 - 発表者 田才雅彦「千歳市 オサツ2遺跡」
- 国際低湿地遺跡研究会（奈良国立文化財研究所） 3月5日
 - 発表者 田口 尚
- 第5回 縄文文化検討会（青森市） 3月26・27日
 - 参加者 田才雅彦・鈴木 信・西脇対名夫・皆川洋一・倉橋直孝
- 帝塚山考古学研究所
 - 第7回「考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状」 3月27・28日
 - 参加者 谷島由貴

(2) 展覧会等協力

- 北海道開拓記念館 第95回テーマ展 4月3日～18日
「掘り出された北の歴史—平成4年度（財）北海道埋蔵文化財センターの発掘調査から—」
- 美幌町博物館 第6回特別展 9月15日～11月14日
「縄文人の世界」
- 岩手県立博物館 第8回国民文化祭記念・第37回企画展 10月1日～11月14日
「じょうもん発信」
- 第18回道民ホール文化財展 主催 北海道教育委員会 2月21日～25日
「先史時代の木工—遺物が語る北海道の木工史—」

(3) 部内研修・研究会

- 発掘調査現地研修会（千歳市オサツ2遺跡・キウス4遺跡ほか） 9月16・17日
「石狩低地帯（旧オサツト一周辺）における縄文時代～擦文時代の集落跡」
講 師 田才雅彦・鈴木 信
「千歳市中央地区の横断自動車道関連遺跡および縄文時代後・晩期の墳墓遺跡」
講 師 皆川洋一・鎌田 望
- 発掘調査報告会
「遺跡調査報告」 11月25日
- 勉強会
「走査型電子顕微鏡操作法」 講 師 花岡正光 12月～3月

(4) 平成4年度分追加

- 国立民族学博物館 アイヌ民具研究会 2月26・27日
発表者 千葉英一 「千歳市美々8遺跡出土のアイヌ民具」
- 帝塚山考古学研究所
第6回「考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状」 3月27・28日
参加者 谷島由貴・越田雅司
- 国立歴史民俗博物館 共同研究
「中世食文化の基礎研究」 共同研究員 越田賢一郎

4 刊行報告書

平成4年度刊行

- 第80集 『滝里遺跡群Ⅲ 滝里32遺跡・滝里33遺跡』
石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第81集 『恵庭市 ユカンボシE 5遺跡』
一般国道36号恵庭バイパス建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第82集 『芽室町 北明1遺跡・音更町 西昭和2遺跡・池田町 十日川5遺跡』
北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第83集 『美沢川流域の遺跡群XVI 美々7遺跡・美々8遺跡・美々8遺跡低湿部』
新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第84集 『函館市 中野A遺跡(Ⅱ)』
函館空港拡張工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

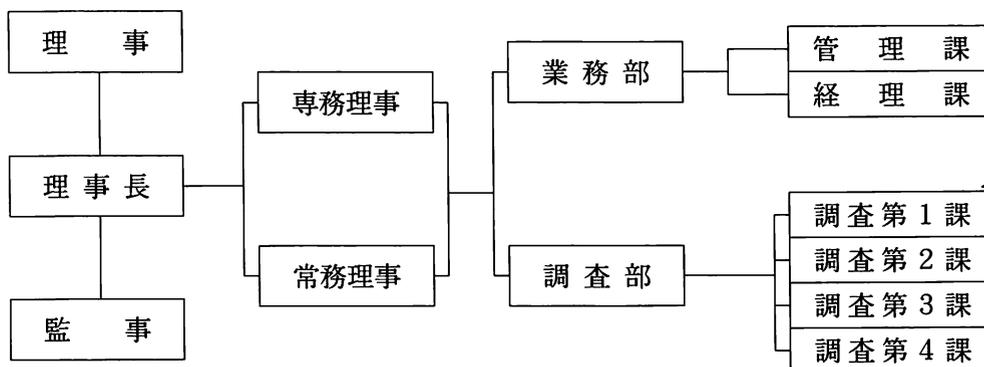
平成5年度刊行予定

- 第85集 『滝里遺跡群Ⅳ 滝里10遺跡・滝里11遺跡・滝里31遺跡』
石狩川水系滝里ダム建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第86集 『千歳市 ユカンボシC 2遺跡』
長都地区道當畑地帯総合土地改良事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第87集 『七飯町 鳴川右岸遺跡』
一般国道5号函館新道(自動車専用道)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第88集 『豊浦町 高岡1遺跡』
北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第89集 『美沢川流域の遺跡群XVII 美々8遺跡・美沢3遺跡』
新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第90集 『千歳市 オサットー1遺跡・キウス7遺跡』
北海道横断自動車道(千歳～夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書

5 組織と機構

役員

理事長	部 茂	北海道教育委員会教育長
専務理事	永 春	北海道埋蔵文化財センター
常務理事	中 福	北海道教育庁生涯学習部文化課主幹
理事	石 林	北海道文化財保護協会副会長
理事	永 井	北海学園大学教授
理事	藤 本	北海道文化財保護審議会委員
理事	北 川	静修女子大学教授
理事	岡 田	北海道大学教授
理事	南 原	北海道企画振興部長
理事	南 榊	北海道教育庁企画管理部長
理事	小 杉	北海道教育庁生涯学習部長
監事	安 達	北海道生涯学習審議会副会長
監事	柚 原	北海道副出納長兼出納局長



職員一覧

業務部

職	氏名	所属
業務部長	○ 中野真吾	
管理課長	○ 井島紀雄	管理
主任	葛西宏昭	"
嘱託	穂坂惣次郎	"
"	藤田忠雄	"
"	篠田千秋	"
経理課長	○ 斎藤邦雄	経理
主任	菅野聡	"
"	吉田貴和子	"
嘱託	重平 洵	"

調査部

職	氏名	所属
調査部長	○ 森田知忠	
調査第1課長	鬼柳 彰	第1課
主任	佐川俊一	"
"	○ 田才雅彦	"
"	○ 田中哲郎	"
"	鈴木 信	"
嘱託	澤田 健	"
嘱託(図書担当)	藤本 昌子	"

職	氏名	所属
調査第2課長	○ 越田賢一郎	第2課
主任	西田 茂	"
"	立川トマス	"
"	○ 工藤研治	"
嘱託	西脇対名夫	"
"	藤原秀樹	"
調査第3課長	○ 千葉英一	第3課
主任	佐藤和雄	"
"	三浦正人	"
"	田口 尚	"
文化財保護主事	皆川 洋一	"
嘱託	鎌田 望	"
"	越田雅司	"
調査第4課長	○ 高橋和樹	第4課
主任	和泉田毅	"
"	花岡正光	"
"	遠藤香澄	"
"	谷島由貴	"
"	熊谷仁志	"
文化財保護主事	○ 山原敏朗	"
嘱託	村田 大	"
"	倉橋直孝	"

○印は北海道教育庁文化課からの派遣職員

調 査 年 報 6
平成5年度

平成6年3月31日発行
編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)561-3131

印 刷 株式会社
札幌キッツ
札幌市中央区南21条西10丁目
☎(011)531-2111
